

---

# 幻想奏鬼響

風月 こん

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想奏鬼響

### 【Nコード】

N3452N

### 【作者名】

風月 こん

### 【あらすじ】

現代に住んでいる主人公。主人公は何時もの日課である散歩をする為に、近くの神社に赴く。しかし神社に着くと、其処は見た事も無い神社だった。突如として街の喧騒が聞こえなくなり、周りは自然豊かな山々だった。其処は結界で世界を囲んでいる隔離された世界。その世界を囲んでいる結果が不安定で自分の現実世界に帰る事が許されない状況の中、主人公はその世界で生活する事を決める。果たして主人公は何を思い、何を見て行くのか……？日常生活をほのぼのと綴る物語。

## 第一話 出会い。 一幕

- 1 -

俺は何が起こったか分からなかった。

仕事が終わりに、車に乗り、家に向かって走り出し、駐車場について車を止めて、暇だったので近くの神社に散歩へ行った。其処までいい。

自分でもちゃんと、自分の行動を覚えている。

じゃあ、此処は何処だ？

目の前に広がる樹海。

後ろには見覚えのない神社。

俺は、地元の神社の境内に上ったはず……。

階段を上り終えて鳥居を潜った後、急に景色が変わった。

そんな事ありはしないのに……。

でも、現に今いる場所は俺の知っている場所じゃない。

「どこだよ……、ココ……」

声に出して言ってみたところで、解決する筈がないのを承知で声に出してみる。

色々と思惑錯誤しながら、神社を見て回る。

見た事のない景色と神社。

小鳥達の鳴き声しかない情景。

自動車や工事の音は一切しない。

神社を回り始めて、1週したところで俺は気付いた。

「神……隠し……」

そんな訳あるはずない！

神隠しは拉致や誘拐と言った類のものだ。

でも、今の状態を説明するにはその言葉しか思いつかなかった。

「何だつてこんな事に……。とりあえず、中に入ってみるか……」

そう言葉にした後、俺は目の前にある神社に入ってしまった。

神社はよくある大社と言われる立派な物だった。

神社関係が好きな自分でも、初めて見る大きさの神社だった。

所々に痛みは見えるが、それでも壮大と言う一言で言い表せる。

「いらつしゃい……って、この辺じゃ見ない顔ね」  
「へ？」

いきなり声を掛けられてびっくりした俺は、変な声を出す。

誰だ？

巫女？

でも、腋を見せる巫女って……。

そんな事を考えていた時、家でやっていたシューティングゲームをふっと思い出した。

『この腋だし巫女装束の女の子はもしかして、博麗霊夢……？』

そんな考えが頭を過る。

しかし、いくらなんでもゲームの世界が現実としてある訳が無い。もし、神隠しだとしてもだ。

あれは、空想の世界で現実じゃないんだ……。でも、神隠しだって現実じゃない。だったら、その可能性だってありえるか……。

そんな歯止めの利かないループ思考に入る前に、霊夢が声をかけた。

「あなたは、里から来たの？」

「えっと、俺は里では無くて、とある地方の都市から来たんですけど、ココ何処なんですか？いまいち場所の把握が出来なくて……」

とりあえず、俺は当たり障りのない事を話す。

「地方の都市？どこそれ？」

「え？いや、日本の地名ですけど……」

「……」

霊夢は少し考える素振りを見せると、直ぐに言葉を発した。

「貴方、外人ね」

「外人？」

「ここはね、『幻想郷』と言って、貴方たちとは違う場所って言うか空間に存在しているの」

俺は霊夢の説明に黙って耳を向けた。

「貴方の様な人をこっちの世界では『外人』と言っているのよ。外から来た人間と言う意味ね」

「別な空間に存在する場所なんてあるんですか？あんまり考えられないんですけど……」

「実際にこうして貴方自身がこの地に足を付け、そして私がいる。それが動かぬ証拠よ」

確かに、俺は今こうして霊夢と話している。

でも、まだ信じられない。

本当にそんな世界が存在するとも言うのだろうか？

これは夢じゃないのか？

そうだ、夢なんだ！

夢だったら、衝撃を与えて、寝ている自分を起こせばいい。

それで全てが丸く収まる！

そう思った俺は、近くにあった樹木に走っていった。

「ちょっと、何やってるのよ！止めなさい！」

霊夢の抑制を無視し、そのまま樹木へ頭からダイブする。

「……、痛い……」

「当たり前よ！行き成り変な行動しないでよね！ああーあ、血が出ちゃってる。ちよつと待ってなさい」

霊夢が社務所に救急箱を取りに行く。

それを見ながら俺は激痛に耐えていた。

痛みを感じながら、俺は思っていた。

『これはやつぱり現実だったんだ。だとすれば、俺は帰れるのか…

……』

計り知れない恐怖が、痛みと共にこみ上げてきた……

数分後、救急箱を持って来た霊夢が俺の額を治療してくれていた。ある程度の応急処置が完了し、霊夢が口を開く。

「これでよし！こんな馬鹿げた自虐行為はもうしない事！分かった！？」

「はい……」

俺は頷いた。

その返事を聞いて気を良くした霊夢は、俺の目を真正面から覗き込み、ウソは許さないと睨みを利かせながら口を開けた。

「貴方、この世界にどうやって入って来たの？」

流石は巫女と言うか女性。

この辺は、ゆっくりと心配そうな声で聞いてくる。

「まったく、最近には本当にあつちこつちから人が入って来て、こつちはイライラしっぱなしだって言うのに！！睡眠時間も削られてんのよ！！本当、どうにかして欲しいわよ……」

前言撤回。

呆れた口調だったらしい……

「そんなに、この『幻想郷』に入って来てる人が多いんですか？」  
「多いも何も、従来の人口から考えて二倍って所かしらね。把握してるだけで……」

「うっは。それはそれは……。本当にごめんなさい」

「別に貴方の所為じゃないでしょ。ところで、どうやってこの『幻想郷』に入って来たの？」

霊夢の口調を聞いていると謝らずにはいらなかったので、謝ってみたが、どうやらそれは正解だったみたいだ。

口調が、先ほどよりは優しくなっている。

とりあえず、この気を逃してはダメだと思い、早急に質問へ答え



る。

「どうやって入ったかは本当に分からないんです。何処にキツカケがあったのかも。ただ、自分の家に帰って来て、暇だったから日課である散歩をしようと思って、神社に行ったら……」

「此処に居たと言う訳ね？」

「はい。鳥居を潜ったら、急に周りの景色が変わっていて、ある程度賑わっていた町並みが消えて自然豊かなこの場所いました」

「それで？」

「現状を把握しようとして、境内を歩いてました。そこで貴女にあったと言う訳です」

「ふーん。その時に、何か気持ち悪いモノに突っ込まなかった？」

紫のスキマの事だろうか？

そう思いつつ、回答を返す。

「いや、本当に鳥居を潜っただけです」

「そう……」

その後、霊夢は何かを考えていた。

ボソボソと聞こえてくる単語に『あんのババア』とか『せつかくお仕置きが出来ると思ったのに』等と聞こえてきたが、怖いので、俺は何も聞いてないし聞こえてない！

「あの……」

俺は、考えを廻らせている霊夢に向かって問いかけた。

「俺は帰れるんでしょうか？」

正直、回答を聞くのが怖い。

この質問で、俺の今後の全てが決まると言っても過言ではないからだ。

最悪、この幻想郷で仕事を探さないと、餓死だ……。

「そうね。はつきり言っこの状態では無理ね。幻想郷には結界が掛かっているんだけど、その結界が安定してない状態なの。そんな状態で送り返したら、結界の狭間を彷徨う事になって脱け出せなくなる。そうなると訪れるのは死よ。だから、安定してからじゃないと送り帰せないわ。そんな理由もあって現状から導き出せる答えは無理って事」

「そうですか……」

「あら、結構落ち着いているのね」

「ある程度、予測はしていました」

「そう」

そこで、俺たちの会話は一旦途切れた。

重い空気を振り払うかの様に、霊夢が立ち上がった。

「此処で話すのも何だから、お茶ぐらい出すわよ。着いて来て」

そう言っ て歩き出す霊夢。

俺も今後の事を考えながら、その後に着いて行く。

「あ、そうだ！忘れてた！」

こんな状況なのに、笑顔になって振り向く霊夢にドキッとした。  
本当に綺麗な笑顔だったからだ。

「私は博麗霊夢。貴方は？」

霊夢の自己紹介に、俺の顔も知らずのうちに微笑んでいた。

「俺は、神月風紫<sup>かみづき ふうし</sup>って言います。宜しくお願い致します」

そう言っ て、俺は頭を下げた。

そして、頭を上げた先には、霊夢の手があつた。

俺は、霊夢を見ながら手を握り握手を交わした。

それが幻想郷で初めての温もりだった……。

「さてっと、じゃ、いきましょつか」

そう言つて、俺を促す霊夢。

俺は少し考えて答えを口に出す。

「あの、博麗さん。お願いがあるんですけど……」  
「何？」

何かの違和感があるのか、霊夢は少し顔を歪めながら言った。

「境内をもう少し見て回りたいんです。さっきも、少し回った所で  
霊夢さんと会ったし、まだお参りもしていませんしね」

「それは別に構わないけど、お参りってお金もってるの？」

「こっちで使える通貨かは分かりませんが、一応は持ってますよ。」

俺の世界では給料日でしたし……」

「ふーん」

そう言つて、前を向き案内を始める霊夢。

俺は、その時のニヤリとした顔を見逃さなかった。

確か、ゲーム世界のこととか、通説なのか分からないが、霊夢は  
貧乏腋巫女とか言われて、お金に困ってたハズだ。

お賽銭の話を聞いて顔がニヤケたと言う事は、現代通貨は幻想世

界でも通用すると言う事かもしれない。

だとすると、香霖堂あたりでの換金が可能と言う事が……。

『銀行から全額下ろしてて良かったあ……』

そんな事を考えていたら、霊夢と俺は神社の賽銭箱前まで来ていた。

「此処が博麗神社の本殿よ」

「最初も思いましたけど、痛んでる箇所が見受けられますよね？」

「ああー、これね。ちよつと事情があつて直せないだけよ」

「そうなんですか？でも、近くで見ると本当に立派だ……」

お世辞でもなく、心の底から本当に思った。

遠くから見た時もあったが、近くで見ると本当に立派だ。

ただ、キョトンと其処に居座っているだけの建物なのに、神々しさがあり、見ているだけでも飽きない。

現代の世界にある神社とは違って、空気そのものが違う。

場所にもよるが、普通の神社だと此処まで澄んだ空気や雰囲気がない。

でも博麗神社は違う。

雰囲気は当然として、体の中から綺麗になっていく感じがずっとしている。

今まで溜めて来た嫌な物が浄化されて行く様な感覚。

「ちよっ、ちよっと何泣いてるのよ!」  
「え?」

霊夢に言われて目に手を当てる。  
涙が出ていた。

「あれ?何でだ……?でも、嫌な気分じゃないんだよなあー」

寧ろ、気分が澄んで行き、とても清々しい気分だ。

「はい」

その一言共に、ハンカチを差し出してくれている霊夢。

「ありがとうございます……」

ハンカチを素直に受け取り、涙を拭く。

「風紫は感受性と靈感が強いようね」  
「感受性と靈感?」

「向こうの世界で何も無い所から、変なの見えたり、感じたりしなかった?」

「ああ、ありました。それも頻繁に……」

「やっぱり……。この神社ね、この幻想郷の結界守っている神社なのよ。それなりに力があるって事なんだけど、風紫は深層意識の中でソレを感じとっちゃってるのね」

「ほえー」

親切に解説をしてくれている霊夢。

一通りの説明を聞いて分かった事は、その感覚は大事にした方が良いと事。

その感覚を研ぎ澄ませば、妖怪や悪霊の類が何処にいるか直ぐに分かるから、逃げて自分の身も守れると言う事だった。

いわば人間レーダーと言う事が……

「さて、どうするの？」

「え？」

また思考の渦に入り込みそうになった時だった為、素っ頓狂な声で返事をしてしまう。

「お参り、したいんですよ？」

「あ、そうでした……」

そう言って苦笑する俺。

目の前にあるお賽銭箱に財布から抜き取った1万を投げ込む。  
その時の霊夢の顔は、満面の笑顔だった……

霊夢の顔から目を離し、博麗神社に挨拶をする。

『コレからこの世界でお世話になります。宜しくお願い致します。  
何かあったらどうかお助け下さい。』

そんな事を思いながらお参りを終える。  
そして霊夢に向き直ると……、やっぱり眩しい位の笑顔だった。

「博麗さん……」

声を掛けても気付いていない。  
どうやら、笑顔のまま違う事を考えている様だった。

「おーい！博麗さんー！！！」

今度は肩を揺らしながら声を掛ける。

「え……」

「お参り終わりましたよ」

「え……、あ、じゃあ、中に行きましょうか」

やっと現実の世界に帰って来た霊夢は、そう言って俺の前に立つ。



そして、何かを思い出した様に、俺に向きをかえ、言葉を口から出す。

「あ、そうだ」

「はい？」

「私の事は、霊夢で構わないわ」

「そうですか？」

「博麗とか言われると、背中が痒くてしょうがないわ……。ちなみに、さん付けも禁止！」

「はは……、了解しました」

霊夢はまた向きを変えて歩きだした。

俺はその後を付いて行く。

そして、小さな角の生えた女の子が俺の後を付いてくる。

小さな角の生えた女の子？

そう思った瞬間、後ろを振り向く。

いた。

女の子が。

角の生えた……。

意識が覚醒した瞬間、俺は声を上げていた。

「うお！何時の間に……！」

「やっほー」

そう返してくる女の子。

その声を聞いてか、霊夢も歩いてきた足を止めて振り向く。

「またか……」

「その言い方、酷くない？」

そう言いながらケラケラと笑っている女の子。

確か、この子は伊吹萃香……。

ゲームはやった事ないけど、Wikiが何かで見た事ある……。

まさか今現れるとはなあ。

運が良いのか悪いのか……。

「あんた、何時の間に現れたのよ」

「今さっき」

「何時も気配を消して来る事も無いでしょうが！」

「癖なんだもん。でも、其処のお兄さんは気付いたみたいだけど？」

「あー、この人は感受性が豊かなのよ……」

「ふーん。それで、誰？この人……」

なにやら俺の話になっているみたいだ……。

しかも、感受性が豊かっただけで納得出来るのか？

流石は鬼の子？萃香？。

まあー、？子？と言っても、俺よりは相当な年上なんだろう。

しかし、この人誰と問われているのに、答えないのは悪いな……

そう思って、俺は自己紹介をする為に口を開く。

「あ、初めまして。俺は、神月風紫と言います。これから宜しくお願致しますね」

言いながら俺は、手を萃香に出す。

しかし、萃香は俺に興味津々で、手の存在に気付いていない。

「あたしは伊吹萃香って言うの。よろしく。でも、あたしの姿を見て驚かないのは凄いな……」

「いや、思いつき驚いてたじゃないの」

「それは、急に現れたからでしょ？違って、あたしの姿にだよ」

「ああ、言われて見ればそうね」

そう言つて、2人は俺に視線を向けた。

「貴方……えっと、風紫だっけ？」

「そうです」

「風紫は外人人でしょ？なのに、あたしの姿を見て驚かないって変じゃん」

「うーん。確かに伊吹さんの格好は変わってますけど、普通の女の子じゃないですか？別に驚きませんよ」

俺の言葉に萃香は、逆に驚いた様子だ。

そして瓢箪に伸ばしていた手を自分の角に向け、指をさす。

「この角、不思議に思わないの？」

「不思議ですよ。でも、こつちの世界では妖怪も幽霊も普通に出ると聞いていますし、角の生えた女の子が居ても不思議じゃないですよ」

俺は本当にそう思っていた。

この世界は何でもありと言う世界らしい。

目の前に出てきた者に一々驚いていたら、心臓が幾つあってもたりなくなる。

なら、素直に全てを受け入れながら、生きた方が驚くよりも何倍も楽しい。

「あたしが鬼と言っても？」

そう言った萃香は不適な笑みをこぼす。

その目は、獲物を見つけた様な興味に満ちた目。

正直、怖い。

怖いけど、此処で目を逸らしてしまったらダメだと直感的に思った。

だから、その目を見ながら俺はハッキリと言った。

「鬼でも喋られれば仲良くなれると思っています。それに、これからこの世界で生きて行かないといけないなら、尚更、ちゃんと前を向いて今を見つめていかないと……」

暫く俺は萃香に興味の目で見つめ……、否、睨まれていた。  
蛇に睨まれた蛙と言つのはこう言つ感覚かもしれない。

萃香の目から目が逸らせないし、体がまったく言つ事を聞いてくれなかった。

そして、数分がたった時、ふと萃香が笑い出した。

「あはは、お前面白いよ！！妖怪と仲良しか！！あたしが今この時、  
お前の肉を酒の肴にしてもいいんだよ？」

背中から冷や汗が出て来るのを感じる。

そんな嫌な汗を感じながら、必死に抵抗の言葉を紡ぎ出す。

「ソレは勘弁願いたいです……」

「あはは」

萃香は一頻り笑って、さらに口を開いた。

「大丈夫。食べたりはしないよ」

「ありがとうございます」

「でも、肴にはするけどね」

お礼を言った後、安堵のため息をしていた俺に追い討ちを掛ける  
様な発言をする萃香。

俺は笑顔を硬直させたまま、萃香に聞いた。

「と言うと？」

「外来の事を聞きながら酒を飲むのさ」

「あ、なるほど」

萃香は、自分の瓢箪に手を戻して、瓢箪の口をあけるとそのまま、中身を口の中に注ぎ込んだ。

俺はその様子を見ながら、また、安堵のため息を吐いていたりする。

あの目は、生きた心地がしない……

「あ、風紫！」

「何ですか？伊吹さん」

「えっとさ、今後ともよろしく！それと、伊吹さんは辞めて……」  
「分かりました」

俺は苦笑しながら答えた。

「では、何と呼べば？」

「萃香でいいよ」

「了解です。今後ともよろしくお願いします。萃香さん」

そう言って俺は再度、手を出した。

手を出した後、手が潰されない様にと思っのはお約束だろうか……

「?さん?も禁止!」

笑顔で言いながら、萃香は手を握り返してくる。

その手は、小さな女の子の手だった。

強く握ったら潰れてしまうかの様な繊細な手。

萃香の温もりが掌から伝わってくるかの様だった。

それと、ちゃんと力をセーブしてくれているのか、俺の手は無事だった。

「さて、それじゃいいかしら?」

霊夢が言う。

「ああー、ごめんごめん。ほら、いこつ!風紫!」

萃香が言う。

「お待たせして済みませんでした。行きましようか!」





第一話 出会い。 一幕（後書き）

初めまして。

風月 こん と申します。

丁稚な作品ですが、どうか宜しくお願い致します。

こんな作品でも良ければ、感想などありましたら、気軽に書き込んで頂けると嬉しいです。

## 第一話 出会い。 終幕

- 3 -

俺の言葉を合図に3人が動き出し、社務所兼住居へと向かい出した。

その間に色々と、神社の説明や幻想郷の説明等もしてくれた。家に着いた後、霊夢はお茶を用意する為、台所へ向かったのだった。

霊夢に「此处で待ってて」と案内された場所は、客間であろうか。殺風景な部屋の中に木製のテーブルが1つと茶箆筥と衣服箆筥が置いてある。

俺が、何も無い部屋をただ見つめていると、萃香が口を開いた。

「驚いたでしょ？此处で霊夢は生活してるんだよ」

笑いながら萃香は言った。

確かに驚いた。

貧乏腋巫女と噂を聞いていたが、コレじゃ流石に寂し過ぎる……。

「此处で？此处って客間じゃないのですか？」

「まあ、客間兼居間って所かな」

「萃香、余計な事は言わなくてよろしい！」

俺と萃香が話をしていると、お茶を持った霊夢が帰って来た。

萃香は霊夢から言われた瞬間、俺の後ろに隠れ、顔をヒョコつとだし、苦笑いを霊夢に返す。

それを見た霊夢は、ため息を一つして、お茶をテーブルの上に置いた。

「必要最低限の物しか揃えられないのよ。だから、あんまり気にしないで……」

そう言った霊夢は何だか寂しそうな顔をした。

「そうなんですか……」

何か事情があるのだろうと思った俺は、それ以上の事は聞かない様にした。

「それより!」

今の心境を吹き飛ばす様な感じで、霊夢は明るく言う。

「風紫はこれからどうするの?」

「そうですね。とりあえずは仕事探して所じゃないでしょうか。

自分の貯金だけで生活も出来ないですし、無限にある訳でも無いですからね」

そう言って、俺は苦笑する。

自分で言った内容を復唱するかのように、これからの事を考える。仕事をするにしても、この世界で自分が出る事があるのだろうか……。

色々と考えを巡らせている間に、お参りをした時の霊夢の表情を思い出した。

お賽銭を入れた時の表情だ。

その事を思い出した俺は、霊夢に問いかけ様と顔を上げる。それと同時に、霊夢が口を開いた。

「あら、一応、考えてはいたのね」

「当たり前ですよ。何もしないで死ぬ事を選ぶ様な人間じゃないつもりです。それに、せっかく新しい土地……って言うか、世界に来ているのに、見て回らないのは損じゃないですか」

「本当に風紫って変わってるねー」

萃香が瓢箪のお酒を飲みながら言ってきた。

確かに変わっているかもしれない。

普通の人だったら、こんな状況は意地でも脱出しようとするに違いない。

俺だって最初はそうだった。

鬼が居たり、妖怪が居たり、幽霊が居たり、何でもアリのこの世界から早く脱出したいと思っていた。

でも、その気持ちより、今はこの世界をただただ知りたいと言う気持ちが強い。

その気持ちに嘘は無い。

しかし、今の状態のままでは流石に無理が過ぎる。

予備知識も無いままに、見ず知らずの土地を歩き回る程、危険な行為は無い。

だったら、仕事をしながら情報を集めて、歩き回った方が良いに決まっている。

その為には、まず仕事を探して安定した収入を得るべきだろう。そして、自分が持っている現代の通貨が使えるのかをハッキリとさせておかないとダメだ。

俺は萃香の言葉に苦笑しながら返事を答え、自分の疑問を霊夢にぶつけてみる。

「まあ、変わっていると言えば変わっているかもしれませんが。普通の人間だったらさっさと逃げたいと、俺も思いますから……。でも、自分の現実に戻れない今は、逃げる事より前に進まないといけない。今立ち止まったら、それこそ？死？を意味していると思いますしね」

「自覚している辺りは、自分の考えと言う訳か……」

萃香はそう言って笑いながらお酒を口に含む。

俺はそのまま言葉を続ける。

「はい。それなりにはちゃんと考えてはいますよ。それで、霊夢に質問があるんですけど、俺が持っているお金は、この幻想郷でも使えるのですか？」

霊夢は飲んでいたお茶を置き、質問に答えてくれた。

「使えると言うのは語弊があるかな。正確には、換金が出来るのよ」  
「換金ですか？」

「そう。香霖堂と言うお店でね」

やっぱり。

俺の予想は正しかったみたいだ。

多分、香霖堂で換金した現代通貨は紫との物々交換で商いが成り立っているのだろう。

香霖堂の店主は、外人から現代通貨を幻想郷の通過と換金し、紫が現代の何かを持ってきて現代通貨での取引を行っていると言う事だろうか……。

もしかしたら、香霖堂の店主が現代の物を趣味で集めていると言う可能性も否定出来ないか。

もしそうだったら、換金率は低そうだなあ……。……。

そう考えて俺は苦笑すると、本題となる質問を霊夢に投げかけた。

「さっき、お賽銭として入れた1万円は、幻想郷で何日暮らせるぐらいの通過に換金されるんですか？」

「そうね。使い方にもよるけど、普通の家庭だったら1ヶ月から2ヶ月は使えるんじゃない。私だったら3ヶ月はいけるわね！」

そう言つて、片腕を上げる霊夢。

傍らでは苦笑している萃香の姿がある。

霊夢は相当な節約生活をしているのだろう。

お賽銭に頼って生活している者にとっては、その日その日を生活

するのが大変なのだろうと思う。

だからか、さっきの笑顔でトリップしていたのは……。

だったら、いい交渉材料にはなるかな。

姿勢を正して更に言葉を続ける。

「なるほど。それだけ高い単価が付くと言う事ですね。霊夢、お願いがあります。仕事が決まるまで、此处でお世話にならないでしゅうか？ちゃんと、生活費も入れますから、どうかお願いします！」

そう言って、頭を下げる。

自分には霊夢の顔は見えない。

萃香のお酒の飲む音だけが聞こえる世界。

生活費を入れると言っても、相手は女性で俺は男だ。

普通だったら断るだろうと思う。

断られたら断られたで諦めるしかない。

でも、今頼りになるのは霊夢しかないのも事実。

俺は返事が返って来るまで頭を下げ続けた。

「男が何時までも頭をさげてるんじゃないわよ……」

霊夢の言葉に合わせて、ゆっくりと頭を上げる。

目の前に居る霊夢の表情は、真剣なものだった。

萃香は庭を見ながら成り行きを見守っているかの様だった。

「生活費は十分に貰っているわ。あんたを世話する分もね」

「それじゃ……」

「ええ、仕事が決まるまでだったら、別に良いわよ。ただし！」

霊夢は真剣な表情から、笑顔になり言葉を続けた。

「庭掃除や、本殿の掃除とかは色々やってもらうから、そのつもりでね。働かざる者食うべからずってね」

「分かりました。世話になる身だし、頑張るツス！」

「うん。よろしい。じゃ、明日からと言う事で、今日はゆっくり休んでなさい」

「了解ツス！」

「それじゃ、あたしは仕事探しに行く時、護衛についてってやるよ」  
「え？ いいのですか？」

「1人で歩き回ると、数日もしない内にバットエンドを迎えるよ？  
それに道案内も必要だろ？ 暇つぶしに丁度いいし、別にかまわないよ」

「ありがとうございます。萃香」

そう言つて、俺は萃香に頭を下げる。

萃香はカラカラと笑いながら、瓢箪を口に運んだ。

そんな様子を見ながら、俺も少し冷めたお茶を口に運んだ。

暫く霊夢と萃香の3人で雑談をしていた。

俺が住んでいた現代の話。

萃香や霊夢が住む、幻想郷の話。

色々と話していると分かるが、幻想郷は江戸・明治にかけての日本の様な姿と言う事だった。

自分には、辛い環境かも知れないと言う事は分かっていたが、ちゃんと生活が出来るのかはやっぱり不安だった。



でも不安ばかりを感じても、前には進めない。

なら、少しでも前に進める様に勉強したり努力したりする。

今の俺にはこのぐらいしか出来ないけど、頑張って生活して行きたいと思う。

当面の目標は職探し。

うん。

頑張ろう。

この世界で生きていく為にも……。

- 4 -

「あつ……」

俺は会話が途切れた時、ある事を思い出して声を上げた。

そして、財布を取り出して霊夢にお金を渡す。

「霊夢、このお金だけど神社に奉納として受け取ってくれないですか？」

「なによ？行き成り……」

現金に視線が釘付けになっている霊夢。

その表情は、不思議そうな顔をしているが、とびっきりの笑顔だ。そのうち、涎とか出て来るんじゃないかとも思う。

萃香も物珍しそうに見ていた。

「えっと、本殿を見た時の傷が気になってしまっ……。全然足りないと思うけど、修繕費の足しになればなって思いました……」  
「ふーん。そう言う事なら貰っておくわ。でも……」

諭吉さん5人の内、2人が戻ってきた。

「このぐらいあれば十分に直せる。お釣りが来るぐらいよ。素直に礼を言うわ。ありがとう」

「そんな！あれだけ立派な神社はそうそうお目にかかれないですし、やっぱり痛んでいたら可哀想ですから」

そう言っ、俺は本殿のある方角を見る。

あんな立派な神社は本当に少ない。

ましてや、泣いてしまう程の神社だ。

綺麗な姿が見たいと言うのは、俺の我侭だったりする。

「もし、お釣りが出たら、霊夢の私物でも買って下さいね」

「わかったわ。さて、今日も遅いし、夕食の支度でもしてくるわ。

萃香、手伝って頂戴ね？」

「あいよ」

そう言っ、微笑む霊夢。

萃香は霊夢の後に着いて行く。

「靈夢、俺は？」

何もしないと言うのは、流石に悪いと思ったので、何か手伝える事がないかを確認した。

「今日は休んでなさいと言ったでしょ？明日から大変なんだから、ゆっくりしてなさい」

「了解」

俺は靈夢の言葉に同意し、お茶を注ぎ直し、お茶をすすする。

暫くして靈夢と萃香が夕食を持ってくる。

夕食が並び、2人が席に着く。

『いただきます』

3人同時に食事を始める。

此処での会話も、他愛もない会話が続く。

俺自身、独り身だったのもあって、こう言う会話をしながらの食事が懐かしく思えた。

流石に泣く事まではしなかったが、グツと来る物はあった。

夕食も食べ終わり、萃香も自分の寢床に帰っていった。

靈夢に部屋を案内されて、床に就く準備をする。

準備が終わり、靈夢が部屋を去る時、俺は自然と口が開いていた。

「霊夢、本当にありがとうございます。明日からも宜しく願います」

「はいはい。こっちこそ宜しく頼むわよ？さあ、明日から大変なんだから早く寝なさい」

「了解」

子供を寝かしつける母親の様に振舞う霊夢。

俺が返事をしたのを確認すると、霊夢は自室に向かう。

さて、明日から神社の手伝いだ。

見ず知らずの世界だし、色々な事が起こるだろう。

嫌な事。

嬉しい事。

死にそうになる事。

その他にも色々な事。

ちゃんと俺は歩いていけるのか……。

色々考えると不安しか残らない。

でも、今からこんな事を考えてを何も始まらない。

当面は、仕事探し。

この目標を達成出来る様にだけはしなないと……。

俺は、当面の目標を再確認してから床に就いたのだった。

## 第一話 出会い。 終幕（後書き）

ここ数ヶ月、本当に暑いですね。

家に空調機が無いので、会社で上司の目を盗みながら書いてるアホです。

皆様もお体にはお気を付けをっ！

## 第二話 就職活動？ 一幕

- 5 -

雀達が歌い始めた頃、俺は目が覚めた。

俺は布団から起き上がり、今まで寝ていた布団を折り畳む。

そして、押入れの中へ運び、障子を開けて、庭を見る。

昨日は疲れていた所為か、布団に入った後、直ぐに意識が無くなった。

今まで、家に帰ってからネットとか趣味に時間をかけていた事で睡眠時間を減らしていたが、此処は何も無い。

何もやる事が無ければ、ただ寝るだけ。

今までの睡眠不足の所為もあるかもしれないが、昨日は本当に良く眠れた。

気分も凄くスッキリしていて、清々しい朝を迎えている。

庭を見ながら、昨日の夜に皆で食事をした居間へ向かった。

霊夢はまだ起きていないのか、部屋は静まり返っている。

そのまま台所に向かい、様子を伺う。

やはり、誰も居ない。

顔を洗いたいなぁーと思い、水瓶を覗く。

中に入っている水は残り少ない状態で、今日で無くなる可能性があった。

水瓶を確認した俺は、水を補充しようと井戸に向かう為、玄関から外に出た。

昨日の霊夢から、井戸は裏庭にあると言う話を聞いておいて良かったと思う。

いきなり役立たずの居候とか嫌だしな。

そう思いながら、井戸へ到着。

井戸から水をくみ上げ、最初に自分の顔を洗う。

地下水を使っているのか、水が凄く冷たくて気持ちいい。  
顔を洗った後、近くにある桶を使って、水瓶と井戸を往復する。  
水瓶も満水状態になり、最後の水を井戸からくみ上げ、水瓶に向  
いた時だった。

「あら、早いね。おはよう、風紫」

霊夢の声が背中から聞こえて来た。

「あ、おはようございます、霊夢。あつちに居た時は、もう少し早  
く起きていたので、ゆっくり寝た方じゃないかな」

「ふーん、そうなの？昨日は良く眠れた？」

「はい、おかげ様で！朝から気分爽快です」

俺は、自然と笑顔になりながら返事を返した。

霊夢の寝巻きは、白地の浴衣だった。

髪はストレートにしており、まだ眠たそうにしている。

俺の返事を聞きながらボサボサ頭を梳かしながら、欠伸を一つ。  
そんな彼女を見て、俺は微笑む。

「ところで何をしていたの？」

「あー、水瓶の水が無くなっていたから補充しておきました。俺に  
出来る事は力仕事ぐらいですしね」

「そう言えばそうね。早速、仕事をしているのはいい心掛けね」

「ありがとございます」

「それじゃ、私は着替えてくるから朝食は待っていて」  
「了解！」

そう言つて霊夢は奥の部屋に消えた。

霊夢の背中を見送つた後、桶に入っている水を水瓶に移し、お湯を沸かそうと思いやかに水を入れる。

幻想郷にガスと言う文明の利器は無く、釜戸で火を起こすみたいだつた。

近くに火種用の杉の木と炭が置いてある。

釜戸の中を見ると、掃除とかはしていない状態で、まだ使える炭も中に置いてあつた。

俺は、火種となる杉の木を少し細かくしてから、釜戸の中に入れる。

その後、火を着ける為の道具を探す。

予想では火打ち石とかかなと思つていたが、何故かチャッカマンがあつた。

多分、流れて来たのだらうと思うけど、ちよつとショックだつた。この流れだつたら、火打ち石がセオリーじゃないか等と勝手な事を思いつつ、火種に火を着ける。

杉の木は、油を多く含んでいるので、直ぐに火は大きくなる。

其処に、炭を二個程投入。

炭の火力をバカにすると痛い目に合うので、少なく入れる。

燃えカスの炭もあるから、十分な火力になる筈だ。

空気を送り込みながら、炭に燃え移るのを確認する。

炭に火が移つたのを確認して、やかんを釜戸の上に置く。

後は朝食の準備を行う所だが、人の家の台所事情は分からないので黙つて居間へ移動する。

居間へ移動した時、着替えて来た霊夢と会つた。

霊夢は、薄っすらと化粧をしており、先程とは違つた印象を魅せ



る。

「お待たせ。今から朝食の準備をするから手伝って」

「了解ッス。あ、お湯沸かしていますので、釜戸を一つ借りていますよ？」

「別に構わないわよ。って言うか、良く釜戸の使い方知ってたわね？」

「えっと、あっちに居た頃、うちの祖母の家が釜戸だったので……」

「そうなの？他の外から来た人から聞くと、？ガス？って言うのがあって、それを使ってコンロで火を点けるって聞いたわよ？」

「地域によってマチマチなのですよ。確かに自分の家ではガスを使っていましたけど、釜戸を使っている家庭はありますよ。田舎限定ですけど……」

「ふーん。そうなんだ」

苦笑しながら俺は答えた。

確かに日本を探してもガスが整備されていない地域の方が珍しい。釜戸を使っている家庭は、何かのポリシーみたいなものがあるのではないかと思う。

そんな事を考えながらも、俺は霊夢にチャッカマンに付いて聞いてみた。

「俺も不思議に思った事があったのですが、火を着ける時、チャッカマンなのですね。コレってあっちの世界の道具だと思いましたけど……？」

「んー、コレは香霖堂で買ったのよ。火付け石より簡単だしね。ただ、名前は分からなかったけど……」

「香霖堂……？」

朝食の準備をしながら苦笑する霊夢から帰って来た答えは、予想通りの答えだった。

色々との道具は役に立っている様だ。

俺は、やっぱりと言う気持ちを押し殺し、俺は鸚鵡返しで霊夢へ聞いた。

「所謂、雑貨店みたいな所よ。香霖堂には外の世界からの道具があるから、行ってみると面白いのも見つける事が出来るかもしれないわよ？」

「それは是非、行ってみたいですね」

「後で萃香に相談してみなさい」

「了解です！」

そう言って霊夢は鼻歌を歌いながら野菜を切り始めた。

料理をしている霊夢は、何処か楽しそうにしていた。

お湯が沸いたのに気付いた霊夢は、お湯をポットに移す様にと言っ  
て来た。

俺は言われた通り、湧いたお湯をポットに移す。

霊夢はこれも香霖堂で買って来たと言っていた。

その言葉で香霖堂に益々興味が引かれる。

とりあえず、今日の行き先の一つに香霖堂は必ず入れようとポットに移しながら決意する。

お湯をポットに移し終わり、手持ち無沙汰になった俺は、霊夢に何をしたら良いかを確認する。

「んーっと、それじゃ、お味噌汁を作るから、鍋に水を入れて沸かしてくれる？」

「味噌汁ぐらいだったら作れますよ？あと、一人暮らしもしていたから、ある程度の料理は作れます。男料理だけど……」

「そうなんだ。じゃあ、お味噌汁お願い。味噌とかは、あの戸棚に入ってるから」

「了解」

「あとの食事の用意は私がするから。貴方は、お味噌汁作り終わったら、境内の掃除をお願い。用意が出来たら呼びに行くわ」

「はい」

俺は返事を返し、味噌汁の調理に取り掛かる。

霊夢に言われた戸棚を開けて、味噌と出汁を取り出し、湧いたお湯の中に適量を入れる。

そこに霊夢が味噌汁の具を入れて完成したので、掃除用具の場所を霊夢に聞いて、境内の掃除に取り掛かる。

境内と行っても何処から何処までを掃除するのか分からず、とりあえず神社前の掃除を始める事にした。

- 6 -

毎日の日課で掃除をしていたのか、参道には落ちている葉や、小石はあまり見られなかった。

掃除を始めてから10分ぐらいたった頃、萃香が空からやって来た。

その隣には箒に乗った少女が1人。

二人の姿を確認して、動かしていた手を止める。

えっと……。

何でもありの世界なのは納得しているつもりだけど、何あれ？  
魔女？

萃香は俺に気付いたのか、手を振りながら近づいてくる。

一緒になって近づいてくる少女。

姿が確認出来るぐらいになり、彼女の外見が肉眼で確認出来た。

白いエプロンをしているが、明らかに魔女ルックスだ。

まさか、魔女が居るとは思いつたよ……。

でも、確かwikiには魔理沙と言ったキャラクターが魔女だった様な……。

萃香に手を振り返しながら、そんな事を思う。

「おはよー、風紫」

萃香は俺の前に着地して、挨拶をしてくる。

隣の少女は筈から降りて、萃香の隣に立ち、そのまま俺を興味深そうに見てくる。

そんな視線に耐え切れず、俺は目をそらし、萃香に挨拶を返した。

「おはようございます、萃香。えっと、コチラの方は？」

俺は魔理沙らしき人物の視線にビクビクしながら聞く。

当の本人は目を見開いて、キラキラした視線をぶつけて来ている。  
俺の何処に興味があるのか……。

ある意味、ちょっと怖い。

「ああー、コッチは？霧雨魔理沙？って言うの。本人曰く、普通の魔法使いだそうだ」

「へー、そうなのですか。魔法使いかぁー」

率直な感想を言いながら、魔理沙に向き直る。

魔理沙の視線は変わらない。

だから、怖いって……。

萃香は俺に手を向けて、俺の紹介を始める。

「魔理沙、コッチの人は？神月風紫？って言うの。外来人だよ」

萃香の紹介が終わり、俺は魔理沙に向かって手を差し出す。

「風紫です。宜しくお願い致しますね」

「おう！魔理沙だぜ！コッチこそ宜しくな！」

お互いの自己紹介が終わり、握手を交わす。

そこに霊夢が朝食の準備を終わらせて、俺の所までやって来た。

準備をしていた為か、袖を捲くった状態だ。

「風紫　！準備終わったわよー。って、魔理沙に萃香じゃない。こんなに朝早くどうしたのよ？」

その問いに魔理沙が答える。

「萃香から変わった外来人が来てるって聞いてね。どんなヤツかと思っただけだ。ついでに、朝食も頂くわよ」

「あんたの場合は、朝食のついでに風紫を見に来たんでしょ？」

そんな会話が霊夢と魔理沙で交わされる。

俺と萃香は、そんな二人のやり取りを見ていた。

魔理沙が俺を興味津々な目で見て来たのは、萃香の言葉が原因だったのかと、一人納得した。

二人の会話を聞きながら時間がかかると思った俺は、掃除の続ぎを始めた。

萃香は俺の行動や二人の行動を見ていたが、何もする事がなく暇になったのか、俺に話かけて来た。

「ねえ、風紫。」

「なんですか？」

「普段から外の掃除してしてたの？」

「いえ、やってないですけど……、どうしてですか？」

「いや、手付きが慣れてるなあーって思っただけ」

「そうですか？でも、そう言ってもらえると嬉しいですよ」

家の掃除とかは会社が休みの日にしていたが、外の掃除と言うのは、まったくと言って良い程、した事がない。

萃香の言葉に、俺は嬉しさを隠しきれない状態で掃除を続けた。

未だに霊夢と魔理沙が話をしているのを見ながら掃除をしていると思う。

その疑問を萃香に聞いてみた。

「萃香、あの二人って何時もあんな感じなのですか？」

「んー、そうだね。姉妹みたいな感じで、話が尽きない状態だよ。止めに入らないと、永遠と話を続けるんじゃないかな」

「止めなくていいんですか？」

「そろそろ止める？」

「いや、俺に聞かれても……、折角の朝食が覚めてしまうのではないだろうか？」

「それもそうだね。どれ、止めに行こうかね……」

そう言って、萃香は二人の間に行こうとする。

その姿を見て、俺は待ったをかけた。

「どうしたの？」

「ちょっと聞きたいんですけど、萃香って朝食は何時も霊夢と一緒に？」

「毎日じゃないけど、大体は霊夢と一緒に食べてるかな」

「それじゃ、霧雨さんも？」

「魔理沙は自分の家で取る事が多いよ。蓄えが切れたら色々な所に出没するけどね……」

「そうですか」

「何でそんな事を聞くんだい？」

「ただ気になっただけなので深い意味は無いですよ。単なる好奇心です」

「ふーん」

「あ、あと今日の事でお願ひがあるんですけど、香霖堂に連れて行つてもらつても良いですか？」

「別に構わないよ。ただ、あそこの店主も色々と変わつてゐるから、気を付けた方が良いでしょう」

「そうなんですか？」

「会えば分かるさ」

萃香は笑いながら言つた。

その後、言い争いと言う名のお喋りな二人の会話を止めに入る。

俺はその様子を見つつ、萃香と霊夢が手招きをしているのを確認して、外篇を持ったまま、三人と合流した。

居間に移動しながらも言い争いを続ける霊夢と魔理沙。

「仲がいいなあー」と呟いたら、二人とも声を合わせて、「腐れ縁だ」と言われた。

良い感じにシンクロしているあたり、本当に仲がいいと思う。





## 第二話 就職活動？ 一幕（後書き）

……暑い。

この異常気象が終わるまで週一回のペースは保てそうに無いかも…。

一話の『一幕』を『終幕』に変更しました。  
宜しくお願い致します。

## 第二話 就職活動？ 二幕

- 7 -

居間に着いた後は、俺がご飯をよそい、霊夢がおかず等を並べていく。

神社なので、神前料理系の質素な食事なのかと思ったが、そうでも無い様だ。

疑問に思ったので霊夢に聞いた所、朝食はちゃんと取らないと力が出ないらしい。

現代の食事は偏りがあったり、朝食を抜いたりと言うのは当たり前だが、やっぱり一日の源は、朝食にある。

この辺りは、幻想郷も現代も変わらないらしい。

霊夢から質素な食事がいいのかと問われ、勘弁して下さいと答えたのは言うまでも無い……。

「ところで霧雨さん、萃香から変わった外来人と聞かされて来たみたいですけど、何て言われたのですか？」

皆で朝食を食べながらの会話が弾み、俺は自然とその質問を口にしていた。

やっぱり、自分の評価って気になるし、どんな印象を持たれているのかも気になる。

「なんか、その？霧雨さん？つてむず痒いから、名前で呼んでくれないか？ちなみに、さん付けも禁止ね」

「え？あ、はい。分かりました」

ここの世界の人達は、敬称で言われるのに慣れていないのだろうか。

霊夢に萃香、魔理沙までもが、さん付けを禁止して来た。

魔理沙本人が嫌がっているのならば、敬称付けは止めるが、この辺りも後々調べて見ようと思う。

「えーっと、？風紫の事を何て聞かされていたか？だっけ？」

「はい」

「変わった人間と言う事と、妖怪とも友達にと言う珍しい人間だと言う事だけだぜ」

「それだけで、あんな興味津々な目をされていたのですか？」

「何を言っているのよ。普通の人間が妖怪と仲良しになりたいなんて普通は言わないぜ？いくら外来人と言っても」

「らしいですね。でも、霊夢や萃香から聞いた話だと、妖怪にだってちゃんとコミュニケーションが取れると言っていました。なら、仲良しまでは行かなくても、話をする仲には成りたいなと……」

「やっぱり、お前は変わってるよ。逆に食われるかもしれないのに、でも、その心意気は気に入った。まあ、努力してみるんだな。何かあったら、相談に乗るぜ」

「ありがとうございます。その時は、宜しくお願い致しますね」

そう言って、俺は頭を下げた。

霊夢と萃香は、俺達の話聞きながら食事を続けていたが、一段落着いたのを見計らって、霊夢が口を開いた。

「さて、今日の予定なんだけど、風紫はどうするの？」

「はい。今日は萃香に付き合ってもらって、香霖堂に行った後、里に行って見たいなと思っています」

萃香は、味噌汁を飲みながら親指を立てる。

任せとけ！と言う合図なのだろう。

「私は、キノコ狩りに行くわ！」

「あんたには聞いてないわよ……」

そう言った霊夢は頭を押さえていた。

頭を押さえていた手を茶碗にも戻しつつも、目線を俺に戻し、更に言葉を続ける。

「風紫、その予定の順番を逆にしない？」

「え？何故です？」

「先に里に行って、宮大工の所に神社の修復を依頼しようかと思っていたの。折角、直せるお金がある事だしね」

「あ、なるほど。俺は別に構いませんよー」

俺の言葉と同時ぐらいに、萃香も左の親指を掲げる。

右手にはご飯が山盛りになっているお茶碗。

何時の間にお代わりをしたのだろう……。

「その時に、ある人物を紹介するわ。きっと色々と相談に乗ってくれると思うわよ」

「はい。わかりました。頑張ってお供させて頂きます」

俺と霊夢の話が続く中、萃香はご飯の四杯目をチャレンジ中、そして、魔理沙は味噌汁をお代わりし、そこに、見た事の無い緑のキノコを混ぜて飲んでいた。

あのキノコ、魔理沙の何処に入っていたんだ……？

そして、魔理沙が美味しそうにキノコを食べているが、食べると同時にピロリロリーンと聞こえそうになるのはどうしてだろうか……？

そんなこんなで各々が食事を済まし、お茶を飲み始める。

俺は、皿洗いをする為に台所へ。

霊夢は、お茶を飲んでからでいいと言ってくれたが、お皿の量も多くないので、全部終わらせた後に頂く事を言い、皿洗いに集中する。

家事を済まし、霊夢の入れてくれたお茶を頂く。

霊夢と魔理沙は、相変わらずの言い争い改め、お喋りに花を咲かす。

萃香と俺は時折、会話に入りながら楽しく様子を窺う。

時間も頃合になり、魔理沙は目的のキノコ狩りへ。

俺と萃香と霊夢は、里に向けて出発した。

萃香と霊夢が居てくれた事もあってか、道中の間は何も無く、俺達は普通に人里へ着いた。

人里の印象としては、知識でしか知らない筈なのに何処か懐かしさを感じた。

現代とは違い、江戸から明治に掛けての農村に見られる様な人里。確かに現代ほど豊かでは無いが、現代に無いモノも存在している。それは活気。

現代での地域住民同士のコミュニケーションは、ほぼ皆無と云って良いだろう。

良くても集会やイベントがある事ぐらい。

しかし、目の前に繰り広げられている光景は、色々な所で情報交換が行われ、和気藹々とした日常が繰り広げられている。

「どう？風紫。これが幻想郷の人里よ」

「はい。凄い活気に溢れていると思います」

霊夢の言葉に俺は啞然としながら答えを口にする。

「やっぱり、風紫も例に漏れず驚いている様だね」

「そりゃそうですよ。俺の居た場所ではこう言う光景は稀ですから

……」

萃香は瓢箪に入って居るお酒を飲みながら、楽しそうに言った。  
俺は苦笑混じりで返す。

「さて、これから宮大工の所に行く訳だけど、私から逸れない様にね。これでも結構広いから」

「分かりました」

霊夢の言葉に俺と萃香は頷き、霊夢を先頭に宮大工の事務所へと歩いて行く。

途中、霊夢へ声を掛ける八百屋や魚屋、果ては酒屋などの客引きを華麗に交わしながら道を進む。

暫くしてから霊夢は足を止める。

俺と萃香は後ろから霊夢の見ている建物を一緒に眺めた。

「へー、思ってたのよりこぢんまりとしてる建物だね。もっと豪邸だと思ったよ」

萃香の言葉に俺も頷く。

目の前に建っているのは、周りに看板も無くこぢんまりとした普通の一軒家。

とは言っても、普通に貴族が暮らす様な大きな建物なのは変わり無い。

知らない人から見たら、とても宮大工が住んでいる建物には見えないだろう。

「ここに宮大工さんがいるのですか？」

「ええ、そうよ。ここの大工さんは、家と事務所を兼用してるから、



普通の家よりは少し大きめの建て住まいなのよ。里の住人は、事務所兼用つても知ってるし、これと言って事務所と分かるモノを置いて無いから分かり難いとは思っけどね」

「なるほどです……」

「それじゃ、中に入るわよー」

霊夢は俺と萃香を伴って、屋敷へと入って行く。

この屋敷は四方を壁に囲まれており、入り口は一箇所となっている。

もしかしたら裏口とか有るかも知れないけど、正面から見た状態でそこまでは分からない……。

また、全体を白一色で統一されているので、何処か清楚感が有る様な雰囲気があった。

何処と無く“城”をイメージしてしまう二階建てのお屋敷だ。

「ごめんくださあい」

門を抜けた後、霊夢は玄関の引き戸を開けながら中に居るであろう主人に声を掛ける。

玄関の中は純和風と言った感じで、生花が客人を迎える様に配置されており、屏風が奥の部屋へと繋がる廊下を塞いでいる。

何と言うか、こう言う家を見るとお金持ちだなと思うのは、現代人の性なのか……。

「はいはい。ちょっとお待ち下さいね」

奥から妙齡の女性の声と足音がした。

足音が近づくにつれ、女性の姿が視認出来た。

女性は着物を着ており、何処かの貴族の様な佇まいを見せ、気品が溢れていた。

また顔は妙齡と思わせない程、整っており、髪はストレートで綺麗な黒色。

長さは、肩の少し下まで伸びていた。

実際の年齢は分らないが、確実に若く見えるだろうその女性は、俺達を確認すると、屏風の前で正座しながら座り、頭を下げながら言葉を口にする。

「いらつしゃいませ。霊夢さんとその御一行様」

言い終わった後、女性は頭を上げ、俺達に微笑む。

うわあ。

凄く綺麗な笑顔だなあ。

こう言う人を大和撫子って言うのかな……。

女性の笑顔に見惚れていると、霊夢が頭を下げる。

俺と萃香も慌てて頭を下げた。

何て言うか、妖怪が人に頭を下げる光景って、結構なレアなのかも知れない……。

「こんにちは、奥様。今日は神社の修繕を、お願いに参りました」

霊夢が頭を上げた後、目の前に居る女性に用件を切り出した。

挨拶や話の切り出し方を見ていて思ったが、霊夢は根が真面目らしい。

それとも現代人が基本を知らなさ過ぎるのかな……。

「畏まりました。ご案内致しますので、どうぞお上がり下さい」

霊夢の言葉に奥方は更に笑顔を濃くして立ち上がる。

その立ち方も気品に溢れ、余計な動作が無く、見苦しく無い程度に着物の皺を伸ばす。

霊夢や魔理沙、萃香と言った人達の服装が何処かおかしかった所為か、着物が凄く新鮮に見える。

そう言えば、里を歩いている時に見た子供とか大人は浴衣とかが多かったな。

一部の人は上半身が裸だったけれども……。

ああ、何か「キャスト・オフ！」とか言っつて、原理が分からない服の脱ぎ方をしている男が居たな。

霊夢や萃香が何も言わないから俺も何も言わなかったけど、今考えるとアレは何だったのだろう。

周りに女性が居て、黄色い悲鳴を上げていたけど、何かの大道芸か手品で、あの人は女性に人気がある人なのだろうか……。

しかし、服を脱いでも女性から人気を得ると言っつのは凄いな……。そんな事を考えている間に、俺達は家の中に上がらせて貰う。

幾分か奥へ進むと大きな部屋に通された。

どうやらそこは客間らしく、大工の主人は工具のメンテナンスを行っているとの事で、連れて来るからお茶でも飲んで少し待っていると云う事だった。

俺達はお茶のお礼を言っつて、奥方はニコニコしながら部屋を後にする。

そんな奥方を見送ってから萃香は口を開いた。

「ふう。何か疲れた……」

「まあ、あんたはそうでしょうね。何処でもマイペースだし」

「それって褒められてないよね？」

「さあね。……ん。このお茶美味しい」

霊夢は萃香を適当にあしらうと、自分の手前に置いてあるお茶に手を伸ばし、口に含む。

その様子に俺もお茶に手を伸ばす。

右の端に座っている萃香を見ると、ブツブツと独り言を言いながら瓢箪に口を付けてカブ飲みしていた。

自棄酒ですか……。

そんな萃香を眺めつつお茶を一口。

「おお、本当だ。これ美味しい……」

「あ、風紫もそう思う？この渋みと甘さの交わりが何とも言えないわよね！」

「そうですね。このお茶は、今まで飲んだお茶で一番ですよ」

お茶の銘柄に詳しい訳では無いが、緑茶だと言う事は分かる。けど、どうしてこんなに甘みがあるのかが分からない。

でも、雰囲気的に高級茶葉を使ってそうだし、この家にしてこのお茶ありと言っ感じだ。

「よう！待たせた。嬢ちゃん」

「……はあ。？嬢ちゃん？じゃなくて、霊夢と言う歴とした名前があるんだから、ちゃんと名前呼びなさいよ」

「あはははっ！これは失礼、霊夢嬢。ところでそちらの方々は？一人は人間じゃないみたいだが……」

行き成り襖から現れた男が霊夢と会話を開始する。

歳は見た目だが、四十路から五十路ぐらいの筋肉質で背は高め。雰囲気は裏表が無い様に感じる明るそうな人。

それが第一印象だった。

その男が霊夢をお嬢と呼んでいるのは、何と云うか不思議だ……。霊夢と昔からの知り合いなのだろうか？

……ってか、霊夢。

大工さんには素の対応なのですね……。

「あー、私の右に居るのは萃香。鬼よ。で、左に居るのが外来人で居候中の風紫」

「へえ、珍しいな。お嬢が居候を許すなんて……」

「今までの外来人は礼儀を知らないのよ。何でこっちの知識があるのか分からないけど、私と会った瞬間に『腋巫女霊夢きたあー！』とか『貧乏巫女と遭遇！』とか色々言ってくるし……」

腋巫女で興奮する理由は分からないが、貧乏巫女と言うのは流石にあんまりだろ、それ……。

俺は霊夢の言葉に心で静かに涙する。

「あんま間違っても無いじゃねえか……。妖怪の山にある守矢神社は博麗神社ほど困って無いみたいだしよ」

守矢神社って、家の近所にあった神社と同じ名前だ。

違う世界で同じ名前の神社が存在しているなんて、珍しい偶然もあるんだな……。

その珍しい偶然である守矢神社に行ったら、奇跡の様な神隠しに合う状態になるとは思っても見なかったけど。

「確かにそうかも知れないけど、初対面の相手よ？普通はそういう事は言わないでしょ。流石の私だって怒るわよ。最近じゃ呆れの方が多いけど……」

「まあ、確かにな」

「風紫に関しても最初は断るつもりだったわよ。妖怪も人間も贖するつもりは無いし。ただ、風紫はそこら辺の外来人とは違って礼儀を知ってるし、生活費を入れてくれた上に神社の修繕費まで奉納してくれたからね。その恩には報わないと……。まあ、行き成り自虐的な暴走に走ったのは驚いたけど」

そう言って霊夢は笑いながら俺を見る。

俺は霊夢から目線を外し、反対を見た。

混乱していたとは言え、あれは流石に無かったな。

霊夢からも怒られているし、今後はもっと冷静に考えないと……。とりあえず、自虐に走るのだけは止めよう……。

「あれは混乱していた所為ですよ。まさか自分が神隠しと言つか、

別な空間に入ってしまうと言うのは俺の世界では在り得ない事ですから……」

「そうね。最初は夢だと思ってたものね」

ケラケラと笑いながら霊夢は話す。

萃香を見ると、俺を見ながら瓢箪を飲みつつニヤニヤしている。

何て言うか、萃香って変な所で器用だと思う……。

俺も苦笑を含ませながら、霊夢に言葉を返す。

「まあ、今はあんな行動を起こすつもりは微塵もありませんよ。安心して下さい」

俺の言葉に「当然よ」と言うてからお茶に口をつける。

そんな霊夢の行動を我が子を見るかの様な瞳で追っている大工さん。

本当、この二人に何があるのかな……。

「まっ、何だかんだと楽しくやってるみたいだな」

「あら、何か勘違いしてるみたいだけど、風紫が来たのは昨日からよ?」

「ん? そうなのか?」

そう言って大工さんは視線を俺に向けて来る。

「ええ。昨日、突如として博麗神社の境内に居たのですよ。だから行き成りの事で混乱してしまい、霊夢にも迷惑を掛けてしまつて……。お恥ずかしい限りです……」

俺は頭の後ろに右手を持って行き、自分の頭を撫でながら答えた。

「ふーん。なるほどな。それで、お嬢。今日は神社の修復依頼だつたよな。こちらら、慈善事業をやるつもりは無いが、その辺は大丈夫なのか？」

俺の返しに納得しながらも何か含みを残して話題を急転換させた大工さん。

一体、何だと言うのだ。

俺から視線を霊夢に戻し、ニヤニヤしながら修繕費が有るのかと言つ事を聞いて来る大工さん。

でも、嫌味がまったくもって感じられない。

「ええ。その辺は抜き無いわ。これで間に合うわよね？」

そう言つて霊夢はテーブルの上に諭吉さんを三枚だした。

霊夢はこれで間に合うとは言つていたが、もし足りない場合は俺が出そうと思つていたので、財布に手を掛ける。

そうすると、諭吉さんの一人が霊夢の側に帰つて来た。

大工さんの手元に居る諭吉さんは二人。



「あの神社だったら、このぐらいあれば大丈夫だ。それに、これ以上を要求しちまったら、何処かの誰かさんに？落とされ？かねないからな」

言って「あははは」と盛大に笑う大工さん。

霊夢は何処か不貞腐れながら大工さんに返答する。

「アレは私とは何にも関係ないわ」

「お嬢がそう思っても、相手はそう思ってくれないみたいだぜ？」

「……はあ」

霊夢は大工さんの一言で溜息を吐き、その様子を見ていた大工さんは、更に豪快に笑う。

「それで、修繕は何時から出来るの？」

「おっと。そうだった」

霊夢の質問に居住まいを正して、真面目な職人の顔になる大工さん。

あー、こう言う真面目な顔も出来るんですね。

「修繕作業は明日からでも入れる。ただ、最初は状況の確認とかになるだろうから、実際の作業はその見積もりが終わった後だな。お

嬢の予定に合わせるけど、何時頃が良い？」

「それだったら、明日からでお願い。やっぱり、早い方がいいでしょう？」

「それもそうだ。それじゃ、明日から作業に入らせてもらおうよ。もし、資金が大幅に足りない場合は、その都度、確認させてもらおうよ。」

「分かったわ。それでお願い」

話が纏まり二人して笑い合う。

その後は、俺と萃香も交えての雑談が始まった。

途中から奥様も混ざり、ちょっとした宴会みたいになっていたのは、幻想郷の成せる技なのか……。

## 第二話 就職活動？ 二幕（後書き）

何とか今月中に投稿出来ました。

もう少し早いペースで書ければ良いのですが……。

誤字脱字など有るかと思いますが宜しくお願い致します。  
次回は来月に更新予定です。

## 第二話 就職活動？ 三幕

- 9 -

結局、大工さんの家を出る頃には夕刻が迫る時間帯だった。

……とは言っても、里にはまだまだ活気が残っている。

俺と霊夢は、途中から出て来たお酒を付き合い合程度に嗜み、この後の予定もある為、途中からお茶に切り替えていた。

萃香は自分の瓢箪のお酒を鰹腹飲んでいるのに、意気揚々と俺の隣を歩いている。

まったく酔っている素振りを見せないのはやっぱり鬼だからなのか……。

「さて、宮大工の依頼は終わったし、次の場所ね。この時間なら寺小屋かしら……」

少し顔を紅くさせた霊夢が俺を見ながら言う。

その霊夢の顔は満面の笑顔だった。

よっぽど“タダ”のお酒を飲めた事が嬉しかったんですね。

でもね、霊夢さん。

その笑顔は反則です。

「ん？どうしたの風紫」

「いえ。何でも……。それより、寺小屋って学校もあるんですか？」

まさか霊夢に見惚れていたとは言えず、気になった事を霊夢へ聞

いて見る。

「そりゃそうよ。里には子供達だっているんだから」

「里の子供達は中々に面白いよ。あたしも一緒に遊ぶ事あるし」

霊夢と萃香が答えてくれた。

「萃香と一緒に遊んでも大丈夫なのですか？」

「ん？どう言う意味かな？」

「いや、子供達は怖がらないのかな……と」

「あー。大丈夫だよ。大人よりは子供達の方が友達さ」

何処か憂いを残した様な表情を見せる萃香。

触れては行けない何かを触ってしまったのだろうか？

「萃香、何か気に障る様な事を言ったらごめん」

俺は正直に謝った。

萃香は驚いた様な顔をしてから何時もの顔に戻り、俺に視線を合わせながら口を開く。

「ん。大丈夫だよ。今はもう、大丈夫だから。だから気にしない！」

その言葉と共にサムズアップをする萃香。

俺も萃香のサムズアップに対して同じ様に返し、杯を交わす様に手と手をぶつける。

その際、萃香が力加減を間違つて、俺の手が壊れそうになったのは言つまでも無い……。

「何やってるのよ、あんた達は……」

そう言つて呆れている霊夢も忘れまい……。

そんな事をしつつ、お店を見ながら目的の寺小屋まであと少しと言つ時だった。

因みに、俺は求人関係の張り紙が無いかをチェックしていたのだが、霊夢達は普通の買い物をする主婦の様に野菜を見たり、今晚は何を作るかと相談していたりした。

その様子を見た時は、本当に主婦じゃないかと疑いかけたけど……。

いや、ある意味主婦か。

そんな事をしながら着いた先には、小さな公民館の様な木造の建物があった。

寺小屋と言つぐらいなのだから、お寺でもあるのかと思えばそうでは無かった。

小さいながらも“学校”だった。

「お寺は何処にも無いのですね。でも？寺小屋？なのですか？」

俺は気になった事を聞いて見た。  
霊夢と萃香は口を合わせて答えた。

「雰囲気よっ！」

「雰囲気だよっ！」

「……。サイデスカ……」

二人は俺に向かってサムズアップをしている。

それを見て溜息を一つ吐く。

その後、俺は目の前にある自称“寺小屋”を眺める。

子供達は既に帰宅しているのか、小鳥の囀り以外は聞こえない。

周りの木々達も風に揺られ、心地良く葉を鳴らし歌っている。

何とも心地の良い空間だ。

「おや、霊夢に萃香じゃないか。萃香は兎も角、霊夢がここに来るのは珍しいじゃないか」

風と木々達の音楽に耳を澄ましていると、寺小屋の中から一人の女性が出て来た。

その女性は青と白より銀に近いロングのストレートの髪をしており、どうやって頭に載せているのか解らない四角形の帽子を被り、服も青と白の可愛い感じのワンピースを着ており、胸の前には赤いリボンを付けている。

スカートにはフリルが付いており、余計に可愛く感じる。

「今日はちゃんと用事があって来たのよ」

女性の問いに霊夢は答える。

「用事？それは霊夢の隣に居る殿方の事か？」

そう言つて、俺を見る女性。

wikiとかゲームで見た事がある様な気はするが、名前が分からない。

霊夢や萃香に関してもそうだが、wiki等で見る画像とか原作の絵以上に皆綺麗だし、可愛いから一目見ただけでは誰が誰なのかサッパリだ。

確かに幻想郷の事に関してはwikiで見えてはいたがそこまでは詳しくは無い。

霊夢と女性との会話を聞きながら記憶の引出しを開け閉めしていたが、結局は思い出せなかった。

女性は何時の間にか俺の近くまで歩いて来ていた。

「初めまして。私は上白沢慧音かみしろなむ けいねと言う。慧音でいい。宜しく頼む」

上白沢慧音と名乗った女性は俺の目の前に立ち、手を差し出す。

俺は差し出された手を握り返しながら相手の目を見つつ、自己紹介する為、口を開く。



「初めまして。俺は神月風紫と申します。風紫とお呼び下さい。昨日、何時の間にかこちらの世界に入り込んでいた者です。まったくの不慣れですけど、こちらこそ、宜しくお願い致します」

そう言っ て頭を下げる。

握手していた手は既に離してある。

「なんと。外来人だったのか。しかも昨日……」

そう言っ て少し驚いた表情を見せる慧音さん。

「そうなのよ。紫が原因だと思ったんだけど、違うらしいわ」

そこに霊夢が話に混ざっ て来た。

俺は黙っ て霊夢と慧音さんが話す事に耳を傾ける。

「しかし、霊夢と一緒に居るとは珍しいな」

「言われると思ったわ。風紫には神社の修繕が出来るぐらいの金額を寄付してもらったし、その恩人を突き放す事は流石の私でも出来ないわよ」

「釣られたな？」

「さて、何の事やら？」

そう言って笑いあう二人。

何て言うか微笑ましい光景だ。

俺と萃香はその様子を各々で見ているだけだった。

「ところで、今日は用があるとの事だったな。ここでは何だし、家  
に上がってから話を聞こうじゃないか」

言いながら進路を変える慧音さん。

俺達は「分かった」と頷きながら慧音さんの後を追った。

慧音さんの後に続きながら歩いていると、里から少し離れた位置  
に慧音さんの家はあった。

理由を聞いたら何でも里の入り口に家があった方が、何かと都合  
が良いらしい。

主に妖怪関係の事で。

暗黙の了解で妖怪は里を襲う事は無いらしい。

それどころか、妖怪も里を訪れ、一緒になって買い物をしたり、  
コミュニケーションを取ったりしていると言う。

やっぱり人間に友好的な妖怪も居る様だ。

だが、稀に幻想郷に来たばかりの妖怪は里を襲うそうだ。

その為、直ぐに里を守る様に、入り口の近くに家があると言う  
事だった。

里の外の事に関しては、時間が許す限り、見回りをもう一人と一  
緒に行っているが、襲われる時は襲われるらしい。

ただ、ソレも仕方が無いらしく、妖怪の存在理由を明確にする為  
に人間を襲う……と言うか、この場合は脅すと言った方が正しいか  
も知れない。

妖怪も人間や他の？モノ？に存在を認められなければ、滅びると  
言う事らしい。

更に人間をずっと食らえば、自ずと妖怪は滅亡する。

食料である人間が全滅すれば、どちらにしても妖怪側は滅亡するしか道は残されていない。

？脅された？場合は人間もある程度、無事に里へ帰還が出来るらしいのだが、？襲われた？場合は、確実に？食われる？そうだ。

慧音さんの話だと、？襲う？のは新参者の妖怪との事。

幻想郷の妖怪にも、人間を？襲う？妖怪もいるらしいが、それでも新参者の妖怪と比べれば、自重をしていると言う。

食料が居なくなると困るのは妖怪に他ならないからだ。

その辺りを分かっている妖怪は、結構いるのだとか。

だから、幻想郷は人間と妖怪のバランスを大事にしている事を、慧音さんは教えてくれた。

ここまでお茶とお菓子を摘みつつ聞いて思った事が一つ。

それじゃ、人間は生かされているのか？と言う事。

「そうでは無い。人間も妖怪が居ないと生きては行けないからな」

「そうなのですか？そんな感じは全然しないですけど……」

俺は慧音さんの言葉に首を斜めに折りながら疑問を投げかける。

「妖怪は人間の？負？の感情から生まれ出た物の怪だ。もし人間から？妖怪は怖い物の怪？と言う感情が無くなれば、妖怪はその時点で滅んだも一緒なのだ。だから、里の外で？脅す？事もある。それに、人間だって妖怪と手を組んで仕事をしていたりする。例えば重い荷物を運んだり、妖怪によるイザコザがあれば、同じ妖怪に頼んで止めてもらうとか。後は妖怪が人間の護衛を引き受けたりと、そんな持ちつ持たれつの関係がちゃんとある。妖怪も人間もソレを

築けているのだ」

「なるほど……」

「里に来る妖怪の中には怖いと意識的に思わせる者もいるが、心根は優しい。だから里の皆にも受け入れられる。そう言う関係もちやんと築けているのに……」

慧音さんは急に考える様な素振りを見せる。

いや、考えているのでは無く、何かを思い出して気分を悪くしていると言った方が良いかも知れない。

そして、霊夢も萃香もだ。

「皆さん、どうしたのですか？」

俺は気になって皆の顔を見ながら声を掛ける。

「折角、良好な関係を気付いている今を壊してしまおうとしている人間が居るらしい。詳しくは分からないが、里で噂になっているのだ。何かの原因で幻想郷に入り込んだ人間が、妖怪を退治しようと思っているのかも知れない。そうなれば人間と妖怪の全面戦争は免れないだろう。まあ、あくまでも噂だがな。」

何とも怖い事を言い出した。

全面戦争？

「えっと、行き成り物騒な話になりましたね……」

「幻想郷は妖怪と人間の絶妙なバランスで保たれているのだけど、そのバランスが崩れかけてるのよ。そのバランスが崩れると言う事は、そう言う事なのよ」

霊夢が付け足す。

簡単に言っと、増え続けている人間側が数にモノを言っで、妖怪の殲滅を行うと言う噂があるのだ。

人間にも能力を持っている人が居る。

それは妖怪でも面倒な能力だったりするらしい。

そんな人間達が集まれば、妖怪だって辛い戦いになると言う事だった。

何でそんな自分達に不利益な事をするのか、俺には到底、理解は出来ないが……。

今の良好な関係があればソレで良い筈なのに、何故にソレを壊そうとするのか……。

いや、簡単な事か。

ただ自分達の平穏が欲しいだけ。

そう考えると、人間の方が卑しく感じてしまう……。

「真実であろうと虚像であろうと、そんな事をさせるつもりは一切無いがな……」

慧音さんはそう締め括った。

俺を始め、部屋の中は重たい空気が支配していた。

「はいっ！この話はココでお仕舞い！！こんなそんな事より、別な話があつて今日は来たんだろ？ほら、風紫！早く用件を話した！話した！」

先程まで黙つて話を聞いていた萃香が、場の空気を変え様と明るく振舞い、俺に話を振って来る。

「ああ、そうだったな。風紫、それで用件と言うのは？」

慧音さんも萃香の話題転換に乗って来た。

でも、何で二人とも辛そう何だ？

萃香の場合は、先程の話から自分が“鬼”と言う事に関係しているからだろうけど、慧音さんが分からない……。

しかし、この話題を引っ張ってもしようが無いし、自分の用件を話した方がいいかな……。

俺は一旦、霊夢の顔を見て、霊夢が軽く頷く。

霊夢が頷いたのを確認した俺は慧音さんに向き直し、言葉を口に出す。

「えっと、実は……」

俺は慧音さんに昨日から考えている就職と言うか働き口の事を話した。

里の事は慧音さんに話した方が早いと、ここに来るまでの間に言われたからだ。

「ふむ。仕事か……」

「はい。先程も軒先等で出ている広告に募集の張り紙が出ていないか確認しながら回ったのですが、何処も人が一杯らしくて……」

苦笑しながら俺は言った。

そうなのだ。

人が多くなっているとは聞いていたので、ある程度の予想は出来ていたが、募集広告がまったく無い事には驚いた。

それぐらい、人は増えていると言っ事だろう。

俺は考え込んでいる慧音さんを、期待の眼差しで見つめる。

「そうだな。申し訳無いが、里での仕事は無理だろうな……」

俺の死が確定した瞬間でした……。

「マジッスか……」

俺は絶望した雰囲気隠そうともせず肩を落とす。

予想はしていたけど、やっぱり辛い。

「今の里は人間の数も増えているからな。何処の店も人員は足りているんだ」

「じゃ、俺の働ける様な場所は……」  
「無いな」

ピシヤリと言い切られてしまった。

俺の中には既に絶望しか残っていない。

そんな表情で、お茶を啜っている霊夢と瓢箪のお酒を呷っている萃香を見る。

二人とも俺から視線を外した。

「里以外にも働き口って無いですか？」

何かに縋る様に声を掛ける。

多分、無理だろうなあー。

「人間が里の外で働くのは無理だ。死んでも良いなら別だがな」

ほら、やっぱり。

俺は慧音さんから視線を外し、霊夢を見る。

霊夢は明後日の方向を見ている為、俺が見ている事に気付いていない。

「霊夢ー、どうしましょう……」



俺の言葉に霊夢は視線を合わせる。

その表情は、困っている様な、呆れている様な、そんな微妙な表情。

ただ、その表情には嫌気と言う感情は読み取れない。

「どうしましうって言われても、仕事が無ければしうがないでしよ。暫くは家に居なさい」

「え？いいのですか？」

驚きながら問いかける。

「だってしうがないでしよ？今の状態がこうじゃ……。一人にして死なれても気分が悪いだけよ」

そう言いながらも、何処か安心させてくれる様な笑顔を見せてくれる。

萃香もそんな霊夢を微笑ましく見ていた。

そんな霊夢の言葉に俺は目を大きくする。

「マジっすか！？やった！！！！霊夢、大好きだぁー！！！！」

俺は霊夢の言葉で嬉しくなり、場も考えずに霊夢へと飛びつこうとするが、霊夢は俺の行動を予測していたのか、手を前に出して俺を抑止する。

「風紫、喜ぶのは分かるけど、その勢いに身を任せて飛び込むと、痛い目に合うわよ?」

そんな怖い事を言ってるのにも関わらず霊夢の表情は何処か少し笑っていた。

俺は霊夢の言葉で落着き、普通に頭を下げる。

「取り乱して申し訳ないです。でも、本当にありがとうございます。霊夢」

「別に……。さっきも言ったけど、一人にして死なれても気分が悪いし、私にとっても風紫は恩人なのよ。その恩を忘れて野に晒す事なんて出来る筈ないじゃない……」

霊夢は照れているのか、顔を横に向けて視線を外した。

うーん、現代人には無い初々しさと言うか奥床しさが何とも言えない魅力を引き出している。

頭を上げた後、ボーッと霊夢を見ていたら、何やら詰まらなさそうに萃香が顔を顰める。

「まっ、風紫が一人になったとしても、あたしが一緒にいるから心配は無いけどね」

萃香が詰まらなさそうに言ってくる。

何か萃香を怒らせる様な事をしたのだろうか……？  
しかし、萃香も俺の身を案じている事に嬉しさを隠し切れず、ニコニコしながら萃香に向かい、礼を言う。

「萃香もありがとう。本当に感謝しています。幻想郷に来て二人に最初に会ったのが本当に救いだし、ありがたいですよ」

その言葉に萃香も幾分か表情が和らいだ。

俺は二人へと感謝を表し、もう一度、頭を下げる。

「風紫は良い出会いをしたのだな」

感慨深そうに慧音さんが言う。

その言葉に俺は深く頷いた。

「はい！俺は本当にこの？出会い？に感謝しています。もちろん、慧音さんもですよ。無茶なお話だったのに、嫌な顔せず相談に乗って頂いたのですから」

「そう言ってもらうと助かる。仕事の事に関しては助けてあげられないが、何かあったら何時でも相談すると良い」

「はい！ありがとうございますっ！」

俺は慧音さんに向かって頭を下げた。

その後は、慧音さんを含めお茶菓子を頂きながら、暫く雑談に興

じ  
る  
の  
だ  
っ  
た  
。



## 第二話 就職活動？ 三幕（後書き）

早めに完成したのでUPさせて頂きました。  
次回は10月にUP予定です。

こんな作品ですが、今後とも宜しくお願い致します。

## 第二話 就職活動？ 四幕

- 10 -

慧音の家を出てから暫く萃香と二人で歩いている。

霊夢は神社に戻って仕事をするとの事だったので、本日の目的地である『香霖堂』へ萃香と二人で行く事になった。

慧音に仕事の相談を持ち出した後、所謂、お茶会が開かれていた。もちろん、お酒は無し。

別に飲めない訳では無いが、慧音が見回りを控えていた為、お酒は無理と言う事になった。

……と言つか、萃香はともかくとして、霊夢はそこまでお酒を飲みたいのか？

そんな疑問を口にしたら、霊夢からは『失礼ね。飲める時に飲まないで飲めないのよ……』と返って来た。

往來の貧乏性と言う性の所為だろうな……。

「風紫、何をボーっとしてるの？」

「あ、いや、何でも無いですよ。あはは」

「ふーん」

考え事をしていた俺に萃香から話しかけられる。

俺は適当に返答した後、もともと興味はなかったらしく、瓢箪を口に付け、一気に飲んで行く。

コレも不思議だけど、中身はどうなっているのだろうか……。そんな訳で聞いてみた。

「コレ？」

萃香が瓢箪に指を指して首を傾げる。

「はい。中身を補充している所を見た事が無いですから」

「これはね、簡単に言つと少しのお水を入れておくと、お酒が無限に出て来るんだよ。だから幾ら飲んでも無くならない。どうだ！凄いだろ！」

そう言つて胸を張る萃香。

何と言つか、本当に何でも在りな世界なのですね、ここは……。無限にお酒が溢れ出てくる瓢箪とか、現代の人間で酒好きが聞いたら喜んで食いつきそうだ……。

まあ、現代に有つたら有つたでアルコール中毒者が増えて、経済が麻痺しそうなだけだ。

「それは凄いですね。だったら霊夢にも分けてあげればいいのに……」

とりあえず納得する。

と言つか納得しておかないと後々苦労しそうだし……。でも、そんなにお酒が湧き出るなら、霊夢にも御裾分けして良いと思つのですよ……。



「霊夢は、飲む時と飲まない時があるからね。飲みたい時にあたしが居れば、そりゃ上げるさ」

「何時も博麗神社に居ると言う訳では無い、と言う事ですか……」  
「そう言う事」

何だ、普通に飲める環境に居るじゃないか。  
心配して損した。

そんなこんなで、色々と話をしていたら、既に目的地である『香霖堂』の目の前に居た。

話しながら歩いていると本当に早く感じるな。

「ほら、ここが『香霖堂』さ。もう、見た目からしてゴミ貯め場としか思えないけど、一応、お店だよ」

萃香が『香霖堂』を指しながら紹介してくれた。

うん、本当にゴミ貯め場にしか見えない。

見せの周りには、電化製品のゴミばかりが並んでいる。  
多分だけど、展示……しているのだと思う。

中には俺の時代から何十年前と言うテレビや冷蔵庫、洗濯機なども有った。

他には、こちらの世界の物なのか分からないが、看板みたいな物や、何かの道具らしき物が色々と並べて置いてある。

これって誰か買うのか……？

「うん。思った通りの反応をしてくれたね」

啞然としている俺に笑いながら萃香は言った。  
こんな光景を見たら、誰だって啞然となる。

「いや、コレは……ね？何と云うか……前衛的なお店？……ですね」  
「だろ？ここは何時だってこんな感じさ」

そう言つて瓢箪に口を付ける。  
その様子を見てから再度、お店を見渡す。  
もし、この状態で黒字を出しているなら店主さんは凄い商才の持ち主なのだろう。

「とりあえず、中に入って見ましようか」

俺が言つと、萃香も返事をして後に着いて来た。

「いらつしゃい」

中に入ると、店主は俺を一瞥してから読んでいた本に目を戻す。  
壁際には小物を飾っている棚があり、中央の商品棚には大・中の様々な道具が置いてあった。  
そして、店内から店主に目を向けると、客には興味無いと言つ感  
じで、黙々と本を読んでいる。

この店主、酷く無愛想だ……。とりあえず店主から視線を外し、小物が展示されている棚へと移動する。

萃香は、中央に置かれている武器らしき物が興味あるらしく、それを見に行った。

「あ、懐かしい、コレ」

手に取ったのはゲームボーイ。

ポータブル時代の先駆者だ。

しかし、中には何も入っていない。

電源を付けて見ても、電池の残量が無いのか、電源すら付かない。ゲーム機を戻して、他の場所へ目を向けると、ゲーム機でペットを育てるキーホルダー型のゲームや、マイナー過ぎるコミック等、多種多様な品揃えだ。

しかし、不思議な事に保存状態は良好だったりする。

コミックスを手にとって確認するが、色褪せも無く、出版されたばかりの状態だった。

他の電化製品も手に取って確認するが、多少の傷が目立つ物もあるが、ほぼ新品に近い。

不思議な事もあるモノだ……。

「風紫、どう？」

「はい。俺にとっては懐かしい品物ばかりですけど、こっちの世界じゃ動かない物だけですね」

「やっぱりそうなんだ」

「ええ。そうですね。俺が見ていたこの箱もそうですね、電気が

無いと動かせない道具なのですよ。こっちの本は別に電気が無くても平気ですけど」

俺は右手にゲームボーイを持ち、左手にはコミックスを掲げる。

「デッキリ？」

「簡単に言つと原動力です。動かす為の力とでも言つのでしょうか」  
「なるほど」

そんな会話を萃香と話していると、何時の間にか店主が俺達を見ていた。

その表情は無表情で何を考えているのか分からない。

あれ？

でも、この顔、どこかで……。

その事を確認しようと萃香へ向くと、萃香は少し嫌そうな顔をしていた。

「君、ここに有る道具が分かるのかい？」

「え？あ、はい……。まあ。」

「ふむ……」

俺が簡単に返事を返すと、何かを考える店主。

嫌そうな顔をしている萃香は、俺の側を離れ様とはせず、店主の動向を見守っている感じた。

そんな萃香に、先程から疑問に思っている事を確認しようとした

時、店主は俺に向き直して口を開いた。

「コレが分かんと言う事は、君は外来人かい？」

「あ、はい。とは言っても、まだ来たばかりの新参者ですけど……」

「そうか。私は『森近 霖之助』と言う。君の名前を覚えてもらっても？」

いきなり自己紹介を始めた店主さん。

相手が名乗っているのに、自分が名乗らないのは失礼なので、きちんと自己紹介をする。

「俺は『神月 風紫』と言います。宜しくお願いします」

そう言つて頭を下げる。

頭を上げると、手が差し出されていた。

俺はその手を取つて握手を交わす。

「宜しく頼むよ。そこで早速なんだが、ちょっと見てもらいたい物がある」

「見てもらいたい物ですか？」

店主さんは頷き、奥へ来る様に促す。

萃香と一緒にいくか確認すると、頷きながら付いて来た。

「風紫、気をゆるしちゃダメだからね」

「え？何故ですか？そんなに変な人とは思えないのですけど……」  
「とにかく、あいつに気を許すと、こっちが大変な目に合う」

萃香は警戒を解かないで俺に言った。

不思議に思った俺は首を傾げた。

その時に思い出したが、疑問に思っていた事を萃香に確認して無かったな。

「こっちだよ……って、萃香、君も居たのか……」

萃香と二人で話していた俺に店主さんから声が掛かる。

……と言うか、萃香の存在に今さら気付いたのか！

鬼の存在感を蔑ろにするとか、凄すぎですよ……。

「居て悪い？」

「いや、別に」

会話が終わる。

え、何？

この空気……。

何やら重いと言うか、直ぐに喧嘩が始まる様な雰囲気周りを支配していた。

「風紫君、君はコレが分かるかい？」

その空気を完全に無視して、俺に差し出す一つの道具。  
それは武器だった。

「店主さん、コレは何処で？」

「良く外の物が流れてくる場所があるんだが、そこで見つけた物だよ。道具の名前と何に使うかと言う事は分かるのだが、使い方がさっぱりだね。もし良ければ、使い方を教えてもらいたいのだが……」  
「名前と用途は分かるのですか？」

俺は名前と用途が分かれば、使い方なんて直ぐに分かると思ったので、確認してみる。

「そうだ。名前は69式ロケットランチャー、用途は武器。僕はね、『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』があるんだ。だから名前とかは分かるけど、使い方までは……」

なるほど。

便利なのか不便なのか分からない能力だ。

俺は目の前に出されているロケットランチャーを手に持ってみる。  
日本生まれの日本育ちである俺に武器の使い方なんて分かる訳が無い。

だから、正直に店主さんへと話す。

「コレは人を殺す為の武器ですよ。俺も使い方までは分かりませんが、この武器に安全装置みたいなモノが付いている筈ですので、それを解除してしまえば使える筈です」

「そうか。使い方が分からないなら仕方が無いな……」

少しガツカリした様子でロケットランチャーを仕舞う店主さん。  
俺は少し気になる事があったので、ロケットランチャーを仕舞っている店主さんへ質問する。

「店主さん、それと似た様な武器を誰かに売ったりしましたか？」

「……何でだい？」

「いえ、少し気になっただけですけど……」

不思議そうな顔をしている萃香と店主さん。

武器の説明をしている時、萃香は他の商品らしき物を見ていたが、俺の声のトーンが少し下がった事が気になったらしい。

「済まないが、コレでも道具屋の店主だからね。客の情報は教えられないよ」

「そうですか。分かりました」

俺はその答えを静かに受入れた。

店主さんの顔は無表情に見えるが、少しばかりそれが崩れた。



ちゃんと客の事を考えているあたりは商人かと思ったが、あの表情と答え方は、暗に売ったと語っている。

もし、本当に売ってなければ、『売ってない』と答えれば良いだけだ。

それを『教えられない』と言う言葉と、一瞬、苦虫を噛み潰した様な表情を見れば、何となく想像は付く。

とりあえず、警戒はしておくか。

行き成り撃たれても嫌だからな……。

それと、慧音さんに聞いた噂も気になるし、用心して置く事に越した事は無い。

「次はコレを見て欲しいのだが、コレは……」

その後も幾つかの商品を見せられ、使い方を教えては次の商品を見せられる、と言う繰り返し作業が続いた。

店主さんも徐々にテンションが上がって来たのか、無表情の顔が段々と好奇心ばかりの少年みたいな顔になっている。

萃香も途中までは物珍しそうに商品を見ていたが、飽きたのか、店主さんが座っていたイスに腰を掛けて、瓢箪の中身を飲みつつ、ボーっと見ていた。

そして今日の最後の商品である布団叩きを説明し、商品の品評会は終わった。

外は既に暗く、霊夢も夕食を作り終わっているであろう時間。

萃香は既に寝ている……。

「いや、今日は本当に助かった。もし良ければ、また来てくれないか？」

何かをやり遂げた表情をしながら店主さんは言った。  
大して俺は疲れた事を隠そうともしないで、返答する。

「別にかまいませんが、里にも外来人の方は沢山居るでしょう?」  
「そうだが、殆どの外来人は気味悪がつて来てくれないのだよ。来てくれる外来人も少数だけだしね」

「まあ、こんな店内で外見がアレですからね……」  
「君も言うね……」

当たり前だ。

あれだけ色々な物を見せられて、尚且つ、説明を要求させられた身にもなつて欲しい……。

嫌味の一つや二つは言いたくなる。

因みに、品評会を行っている最中、店主さんはある程度、色々な表情を見せてくれた。

最初、何であんなに無表情なのかを聞いたら、大体のお客さんは、一回きりで後は来ないのだそうだ。

店の中にも二分居るか居ないかだと言う。

だから、愛想を出してやる事も無いとハッキリと言い切った。

それは商人として問題が有ると思うが、口にはしない。

「でも、ここは俺の知らない物も沢山あつて面白い物もありますから、時間を見つけてまた来ますよ」

「それは有り難い! お礼に給金は出せないが、良い物を見せようじゃないか」

「良い物……ですか？」

「ああ、これさ」

そう言っ出て出されたのは日本刀。

鞘から刀身を出す。

鐔の所に彫られている名を確認した。

「こ……、コレって……！」

「どうだい？見た所、武器を持って無いみたいだからね。護身用に一本上げようじゃないか。ちなみに、研磨は僕がしておいたのさ」

何処か偉そうに語る店主を無視して、刀を見回す。

とても綺麗で刃こぼれ一つ無い。

店主が刀を研いだと言っていたが、その技術も半端じゃない。まるで新品だ。

そもそも、この刀自体が持つ力なのかも知れない。

「これ、本当に貰っていいのですか？」

「ああ、今日の給金だと思ってくれ」

「ありがとうございます！！マジで大切にします！！」

「そこまで喜ばれると、こちらも嬉しいよ」

俺は名刀・小狐丸こぎつねまるを大事に抱え、思いっきり頭を下げる。

今の日本では所在が分からなくなっている名刀だ。

まさか、この名刀が幻想郷にあるとは思ひもなかった。

初めての給金だし、大事に使おう。

俺は心の中でそう決意した。

因みに、刀マニアじゃないよ？

本当だよ？

偶然、知っている名刀だったただだよ？

……、って俺は誰に言い訳してるのだ……？

「あ、ところで話は変わるのですが……」

刀をベルトへ差し、固定した後、店主さんを見た時から思っていた疑問を投げかける。

「今日、里に居ましたよね？」

「うん。用事があつて、里には出かけていたけど？」

「その時、何で脱いでいたのですか？しかも女性の前で……」

「あの光景を見ていたのか。参ったな……」

店主さんは少し照れた表情をした後、口を開いた。

「アレは里にある大きな道具店から帰った後だったんだけど、どう言う訳か女性に囲まれてしまつてね。早く帰りたかつたし、一々言葉で言うのも面倒だったから、服を脱いで女性を遠ざけ様と思つたら、逆に何か喜ばれてしまつてねえ」

あ……、あれ、大道芸じゃなかったのか……。  
店主さんは、頭を掻きながら話を続ける。

「仕方が無いから、そのまま裸で逃げる様に帰ったのさ。その時、女性達が『噂通りよー』と騒いでいたのが気になったけど、何だっただらうねえ」

……。

普通、裸のまま帰るか？

やっぱり、この人は何処がおかしい……。

霊夢や萃香が『癖がある』と評価していたのが分かった気がした。

「そのまま無視して帰れば良かったじゃないですか？」

「やっぱり、何かをして帰った方が心象的にも離れてくれると思って……。結果は散々だったけどね。しかし、やっぱり服は着ない方が動きやすいな。今も窮屈で仕方が無い……」

うん。

馬鹿だ、この人。

常識を分かっているのに、何故そう言う考えに至るのだろうか……。

普通にしていればカッコイイし、それなりにも人気が出るだろうに……。

あ、人気は有るのか。  
変な意味で……。

「まあ、分かりました。何で服を脱いでいたのかと言う疑問も解決しましたし……」

「なんだったら、今も脱いであげようか？どうも服を着ていると調子がイマイチだからねえ」

「いえ、脱がれても……」

「キヤアアアアアスト・オフツツツツツツツツツツ！」

困ります……と続けようとしたら、人の話を聞かないで勝手に脱ぎ始めた店主さん。

風呂以外で男の裸なんて見たくねえ！！！！  
と言うか、と言う原理で脱げて行くのだ？

服の方から身体を離れている様な錯覚さえ覚える。

店主さんの服が全部脱ぎ終わる前に、何やら重たく鈍い音が響いた。

擬音にすると、「ドゴォ！」と言う感じだろうか。

その音を境に、店主さんは前のめりのまま倒れていった。

俺の方へ倒れて来たので、俺はそれを避ける。

「危なかったね、風紫」

先程まで寝ていた萃香が犯人だった様だ。

自分の手枷である鉄球を店主さんの頭へとぶつけた様だった。

「だから、油断したらダメだって言ったじゃないか。服を脱ぐ様な話題を振ると、絶対に脱ぐんだから」

「そ……そうなのですか。今度から気をつけますね。もう、男の裸は見たく無いですし……。それにしても、助けてくれてありがとうございます」

「だって、あたしは風紫のガードさんだからね！」

そう言っただけで笑う萃香。

俺は「ありがとう」と返すと、ブイサインをしながら瓢箪に口を付け、美味しそうに飲み始める。

何と言ったか、店主さんは癖がありすぎだろう……。

まあ、ともあれ、成仏して下さい……。

そんな事を思いつつ、手を合わせて祈る。

「ば……僕はまだ死んでない……」

あ、また気を失った……。

「さて、帰ろうか、風紫。霊夢も夕飯を作って待ってるかも……」  
「そうですね。帰りましょうか。それじゃ、店主さん、また来ますね」

聞こえていないであろう店主さんに向って声を掛けると、俺と萃香は外に出て帰る方向に歩く。

外は既に夜の空気になっており、月明かりと星々の明かりを頼りに道を歩く。

二人で暫く歩いていたら、萃香から声が掛けられた。

「風紫、ちょっと我慢してね。このままだと遅くなるから……」  
「へ……ってうわぁ！」

萃香は俺の腰を軽々と持ち、空中に浮き上がる。

俺は驚いて声を上げてしまったが、徐々に高度が高くなると、他の所も見えて来た。

里からは光が漏れ、煙が上がり、それぞれの家庭での団欒が始まっている。

山の方に目を向けると、所々に明かりが見えるが、その明かりが移動していると言う事は、何かが移動していると言う事だろう。

山の頂上には博麗神社とは違う神社が見える。

あれが大工さんの言っていた守矢神社だろうか？

今度、機会があれば行って見よう。

何だか単なる偶然にも思えないし……。

「凄く気持ちが良いですね、萃香」

「そうだろう？あたしも飛んで散歩するのが好きなのさ。風紫も飛べる様になればいいのにね」

「あはは。流石にそれは無理ですよ」

「そんな事無いんじゃない？霊夢も飛んでるし」

「言われてみれば……」

萃香の言葉に苦笑しながら答える。

流石に普通の人間が飛ぶ事は出来ない。

でも、霊夢が飛んで神社に戻った時は盛大に驚いたな。



一瞬、霊夢も妖怪なのかと勘ぐってしまったが、今思うと、かなり失礼だよな。

「ま、飛べる様になる薬を作れそうな薬師は知ってるから、今度、そっちにもでも行つて見ようか」

「ははは……、機会があつたらお願いします」

本当に何でもありなのな……。

人間が飛べる様になる薬つて凄すぎるだろ……。

そんな下らない話をしながら博麗神社を目指す俺達。

暫く空の散歩を楽しんだ所で、何かが俺達に向ってくる気配を感じる。

気になったので、萃香に確認して見た。

「萃香、アレ何ですか？」

「ん？どれ？」

「山の方からです。黒くてカラスみたいなのが飛んで来るのですが

……」

そう言つて、萃香は俺が指を指した方向を見る。

そして、萃香が答える前に、その物体は目の前に居た。

……ってか、早っ！

「清く正しく射命丸文、ただいま登場ですっ！」

「文か……。何しに来たの？」

どうやら知り合いらしい。

最初、鳥だと思った物体は、羽根付きの女性だった。

白いブラウスに黒いスカート。

頭には天狗の想像図で良く見る帽子を被っており、一本足の下駄と言つより一本足の靴を履いていた。

「何って取材ですよ？」

「誰の？」

「妖怪と仲良くしたいと言っているこの人間です」

「誰から聞いたの？」

「魔理沙からの情報ですっ！」

萃香は呆れた様な溜息を一つ吐く。

と言つか、俺の取材って、この方は記者なのか？

「今は帰ってる途中だから、明日にしてくれないかな……」

「だったら、私も一緒に付いて行きます！ー！」

「霊夢が怒るよ？」

「怒られても取材を続行するのが、新聞記者ですから！」

深い溜息を漏らす萃香。

やっぱり、この人は新聞記者らしい……。

何を言っても無駄の様なので、自己紹介などの会話を交えながら、一緒に博麗神社へと移動した。

「今度はあんたか……」

博麗神社に着いた俺達を見た霊夢は、呆れた表情をしつつ頭に右手を置きながらの一言目だった。

「ただ今戻りました」

「戻ったよー」

「おじゃましますっ！」

三者三様に言葉を返す。

霊夢は呆れた表情を戻し、皆を連れて居間へと移動する。

俺は話しながら移動している三人の背中を見ながら、一緒に移動するのだった。

## 第二話 就職活動？ 四幕（後書き）

二話が本当に長くてごめんなさい（汗）  
今回は香霖堂の店主さんが絡むお話でした。  
ある意味強引過ぎたかもしれませんが。  
以後、気を付けます。

そして、本当に今更なのですが、このSSにはキャラ崩壊が含まれる事があります。

と言うか含まれます。  
なるべくそうならない様に書いていますが、キャラ崩壊がおきてる場合は、広い心で見えて頂けると嬉しいです。

また、今回の内容は本当に好き勝手にやっています。  
物語上、必要な事だとは言え、賛否両論あるかも知れません。  
それも広い心で見えて頂けると助かります……（汗）  
そして、東方の雰囲気壊さない様に頑張ります……（滝汗）

次回予告 ～ Next Story

第二話 就職活動？ 終幕

「風紫さんと入りますから、お先にどうぞ」  
「ぶうつうつうう！！！」

俺は自分で認識した瞬間、お茶を盛大に噴出した。  
十月中旬～下旬公開予定……。

## 第二話 就職活動？ 終幕

- 1 1 -

僕は今、霊夢達とご飯を食べています。

霊夢とご飯を食べる時つて、必ず誰か居ます。

まあ、まだ二日目の夜ですから、必ずと言う訳では無いのだけ  
ど。

とりあえず、萃香は別に良いのですよ。

僕のボディーガードをしてくれていますから。

でも、何で新聞記者がいるの？

僕が取材されるらしいけど、ただの人間だよ？

まあ、答えは俺の所為だったりするのだけど。

自業自得とも言っね……。

「はふう。やっぱり霊夢さんのご飯は美味しいですね」

お味噌汁を飲みながらしみじみと語る彼女は“射命丸 文”さん。  
俺が萃香に抱えられて博麗神社へ飛びながら戻って来る最中、空  
で遭遇したのだ。

その際、俺達は飛びながら自己紹介を済ませていた。

文さんは、何でも幻想郷一の新聞記者らしい。

あくまでも文さんの自称なのだけど。

因みに、最初は射命丸さんと呼んでいたのだが、余りにも舌を噛  
みそうだったので、名前で呼ぶ事にした。

その際、「あれ？もしか、私に一目惚れですか？」と笑いながら  
言われたので、試しに頷いたら、顔を赤くして文さんが黙り始めて  
しまった。

……と言つか、名前を呼ぶイコール一目惚れと言ふ理論は何処かおかしくないか……？

「いや、文さんって、普通に綺麗で可愛いし、一目惚れしてもおかしく無いと思うのですよ」

「えう！えっと、あ、あの。その。ありがとうございます。でも私、何時も邪魔扱いされているので、その……、そんな事をハッキリと言われた事なくて……。えっと。その。まずはお友達からで……」

そんな感じで、マジに取られそうだったので誤魔化そうとも思ってたが、折角なのでそのままに。

折角、友達になってくれると言っているし、それなら何も問題は無い。

閑話休題……。

文さんが俺に近づいたのは、勿論、取材の為。

何処からか噂を聞きつけて、実際に俺を見に来たとの事だった。

噂の出所は……、考えなくてもあの人しか居ないだろう。

文さん本人も彼女から聞いたと言っていたしね。

それに、俺の事を知っているのは限られるのだから……。

本当だったら少し取材して帰る予定だったらしいのだが、俺の発言の所為で、現在は皆で夕飯と一緒に食っている。

しかも、昨日と今日の朝は俺の隣に萃香が座っていたのだが、今は文さんが座っている。

萃香は霊夢の隣で山盛りのご飯を食べつつも少し不機嫌な様子。

あ、五杯目に手を出した……。

……、自棄酒の次は自棄食いか？

「文、あんたは何でご飯まで一緒に食べてるのよ？まあ、美味しいと言われて悪い気はしないけど」

「そうだよ。風紫の隣は私の指定席なんだよ！」

「そんな事、何時から決まったのよ……。と言うか、あんたも自分の家でご飯食べなさいよ……」

「いいんだよ。あたしは風紫のガードだから。あたしの食費も風紫が出してくれるさ！」

そんな事を言った萃香は目を輝かせながら俺を見る。

その目を見ながら溜息を一つ吐き、財布を取り出して霊夢へ諭吉さんを一人渡す。

「霊夢、コレ萃香の食費でお願いします……」

「別にかまわないわよ。それに、風紫のお金だって無限じゃないでしょ？何かあった時の為に残して置きなさい。それに、言ったでしょ？風紫には数ヶ月先の分まで食費を貰ってるって」

「でも……」

「大丈夫よ。風紫が心配する事じゃないわ」

霊夢はお味噌汁を片手に微笑む。

「さっすが！霊夢は分かってるね！！」

俺と霊夢のやり取りを見ていた萃香が言う。

その笑顔は、正に計画通りと言う悪人みたいな笑顔だった。

ただ、一瞬で元の無邪気な笑顔に戻ったのだけど。

霊夢はその言葉に「はいはい」と適当に相槌を打ち、沢庵を一切れ摘み、食べる。

「風紫さんって、意外とお金持ち？」

「そんな事はないですよ。幻想郷に入った日、ちょうど給料日だったですよ。それで、現金を手にした所で幻想郷に入ってしまったので、お金がある様に思っただけです」

現金を仕舞う時に俺の財布を見た文さんの質問に答える。

その回答を聞いて、文さんは何かにメモを取り始めた。

メモ帳の中身を見た俺は感心する。

至る所に付箋が張っており、色々な事が事細かに書かれていた。

「やっぱり、記者らしくはしているんですね」

「らしく…は酷く無いですか？コレでも？文々。新聞？の記者ですかね」

そう言った文さんは、豊満な胸を張り、元々大きい胸が余計にでかく見える。

俺の視線に気付いた霊夢が札を一枚、俺に向って投げながら注意を促す。



「風紫、鼻の下が伸びてるわよ……」

「え？あ、その、ごめんなさい……」

「別に大丈夫ですよ。ただ目の前がねえ」

その言葉に文さんの前に居る萃香を見ると、文サンの胸を涙目で睨んでいる。

そっちかよ……。

「まあ、萃香さんには無いモノですからねえ」

「むう……」

文さんは自分の胸の前で両手を交差させた後、胸の下に交差させた腕をもって行き、自分の胸を高々と掲げる。

えーっと、これ以上、萃香を煽らないで下さい……。

寧ろ、天狗って鬼には頭が上がらないのでは無かったですか？  
文さんと萃香を見ていると、その噂が嘘だと思えるぐらいに仲が  
良いけど……。

しかし、今の萃香は瞳から涙が溢れそうだった。

そんな萃香が自分の胸を見て更に涙を濃くする。

これはフローした方がいいのかな……。

「萃香、男の俺が言うのも変ですけど、胸の大きさは個性ですよ。  
そんなに落ち込まないで下さい」

「へー、じゃあ、風紫は大きい胸と小さい胸のどっちが良いの？」

そこに食いつくか!?

霊夢に質問されて、俺は顔を熱くした。

こう言う話題に慣れていないからだ。

女の子って、やっぱり胸の大きさに拘るのかな……。

「俺は俺を好きになつてくれた人の胸が好きですよ。まあ、向こうで付き合つた経験なんて無いので、どの胸がと言う前に母親以外の胸なんて見た事がないですけど」

恥ずかしさを隠す為、言葉にした後、ご飯を口へと持つて来る。その後は、おかずを口に頬張り、皆の顔を見ない様にした。確実に顔は赤くなっている筈だし……。

「風紫さんって、女性経験無いんですか!？」

「……、悪かつたですね……」

文さんが驚いて眼を大きく開けている。

そして、すかさずメモを取っていた。

それを見て俺は慌ててメモ帳を取り上げ、メモする事を止める。

「文さん、プライバシーは守らないと……」

「ううっ、分かりました……」

そう言いながらメモ帳を文さんへと渡し、文さんは少し落ち込み

ながらもメモ帳を仕舞う。

その後、魚の焼き物を穿り始めた。

他のメンバーは何故かニヤニヤしていたが、あえて突っ込まない。

「きっと、風紫を気に入ってくれる人も現れるんじゃない？向こうの女は見る眼が無さそうだし、もしかしたら、幻想郷で結婚しちゃうかもよ？」

「そうですね。もし、こっちで結婚が出来たら、俺はその子を、一生を掛けて守りますよ。何処まで出来るか分かりませんが。でも、きっと向こうと変わらずモテる訳が無いですよ。外見や顔がいい訳でも無いですから」

そう言って苦笑を漏らす。

そして、側にあるお茶を飲みつつ、皆を見たら……って、あれ？

「みんなー。おーい？どうしたのですかぁ？」

俺の言葉に皆が意識を戻す。

俺、何か変な事を言っただけ……。

「風紫さん、近いうちに絶対そう言う女の子が現れると思います！」

「はあ、ありがとうございます……」

突然、文さんが身を乗り出して、言っただけ。

俺は生返事を文さんへ返しておく。

彼女居ない暦イコール年齢が、そこまで力強く同情されるとも思  
って無かったけど……。

その後、俺達は取りとめの無い会話を繰り広げ、俺と霊夢は一緒に  
食器の片付けを行っていた。

萃香と文さんはその間に将棋を始めており、時折、台所に文さん  
の「待った」の声や、悩む声が聞こえて来る。

どうやら文さんは萃香に押されているらしい。

俺と霊夢は食器を片付けた後、お煎餅を持ち出し、新しい茶葉を  
出してお茶の準備をする。

お湯を沸かしてから居間に戻ると、文さんが手を床に着け、頭を  
下げていた。

どうやら、将棋は萃香が勝った様だった。

「さてさて、お二人ともお茶は如何ですか？」

「あ、頂きます」

「あたしもー！」

俺の言葉に将棋を片付け始める二人。

霊夢はお風呂の準備をするとの事だったので、俺も沸かせる様に  
やり方を教えてもらう為、居間に二人を残し、俺と霊夢は外へと行  
った。

お風呂の外側には薪が用意されており、この薪を使ってお風呂を  
沸かすらしい。

俺は霊夢に言われて、井戸とお風呂を往復し水をお風呂へ入れて  
行く。

お風呂へ水を入れ終わった後、霊夢の場所へと移動する。

霊夢は既に薪に火を入れており、時折、木が跳ねる音がする。

闇夜に燈る炎は、淡いオレンジ色をしており、靈夢の顔に綺麗な光が当たり、とても幻想的な情景を映し出していた。

俺はその様子に見惚れつつも、靈夢へと声を掛ける。

「水、入れ終わりましたよ」

「そう。ご苦労様。一人の場合は先に水を入れてから薪を燃<sup>く</sup>べて頂戴。そうしないと、お風呂が焦げちゃうから」

「了解。しかし、薪の匂いと木が弾ける音は、何だか落ち着きますね」  
「そうね……」

その後の俺達は炎を見ているだけで会話らしい会話は無かった。目の前の炎は、ほの暖かい熱を俺達へ向け、煙は天まで届く勢いで上っている。

そんな光景をボーッと眺めていたら、靈夢から声が掛かった。

「風紫、幻想郷の二日目はどうだった？ここでは生活して行けそう？」

「そうですね。やっぱり俺がいた所とは全然違いますし、結構、驚きの連発でした。仕事が無いと聞いた時は本当に死を覚悟しましたが、靈夢や萃香、それに慧音さんに文さんに魔理沙、そして香霖堂の店主さんとお知り合いになる事が出来ましたからね。幸先は上々と言う所じゃないでしょうか」

「そう、良かったわね」

「はいっ！それと靈夢には本当に迷惑を掛けっ放しですけど、これからどうか、宜しくお願いします」

そう言って霊夢へ頭を下げる。

霊夢の表情は分らない。

でも、霊夢と萃香に拾ってもらわれなければ、俺はこうして生きている事が出来ないのも事実だ。

その事を考えると、俺にとって二人は命の恩人。

そう思つと、頭を下げずには居られなかった。

「あ、もちろん仕事が無いのであれば、自分で仕事を考えてお金をちゃんと稼ぐ様にするので、ご安心下さい！！ちよつち、時間は掛かると思いますが……」

言いながら頭を上げ、苦笑しながら霊夢を見る。

霊夢の表情は子供を見る様な慈愛の表情をしていた。

いや、それ以上に何かを感じるのだが、言葉では表現が難しい…

…。

「期待してるわよ。風紫」

「了解！」

霊夢は微笑み、その微笑みに答える様に俺は元気に言った。

霊夢の微笑みは本当にとても綺麗だった……。

俺と霊夢が部屋へ戻ると、萃香と文さんは囲碁に興じていた。

囲碁のルールは分らないが、萃香が訝しい顔をしていると言う

事は、萃香が劣勢なのだろう。

そんな真剣勝負の最中に霊夢は俺と自分のお茶を入れながら、二人へ言葉を投げ掛ける。

「二人とも、お風呂も沸いた事だし、先に入って来たら？」

霊夢の言葉に、囲碁の盤に向けていた視線をそのままに二人は同時に返事を返す。

「あ、風紫と入るから先にいいよー」

「風紫さんと入りますから、お先にどうぞ」

……。

は？

この二人は今、何て言った？

一緒に入るだ……と！？

「ぶつうううー！！！」

俺は自分で認識した瞬間、お茶を盛大に噴出した。  
良かった。

霊夢の隣に座っていて……。

まあ、俺は盛大に咳き込んでいるが……。

「あんた達バカじゃないの？風紫は男よ？」

霊夢さんの言う通りだ！

お茶を噴出した所為で咽たので、サムズアップを霊夢へ向ける。

萃香は何となく言いそうだから分かるけど、何で文さんまで……？

「私の背と体系だったら、親が子供を入れてる感覚だから大丈夫だ  
って!!」

そんな問題じゃ無いと思います、萃香さん……。

寧ろ、貴女の方が、俺よりずっとずっと年上じゃないですか……。

「私は何となくです。それに取材もありますから。あと人間の男と  
入っても気にしませんし」

俺が気にするわっ！

君達、俺が女性経験無い事を良い事に、俺を玩具にするつもりだ  
ろっ……。

「そんな事は無いですよ？」

「そんな事無いよー」

俺の疑問が表情に出ていたのか、それとも俺の心を読んだのか、  
何故か同じタイミングで返事をする二人。

でも、その表情と言つか視線は空を泳いでいる。



滅茶苦茶バレバレです……。

「あー、二人共」

そんな視線が挙動不審になっている二人に声を掛ける。  
因みに霊夢は、お茶の御代わりをしていた。

「いいですか。俺は男です。そんな俺が萃香や文さんと一緒に入ったら、理性が働かなくなるかも知れません。それは女の子として、非常に拙いと思うのですが……」

いや、俺が理性を無くしても二人なら俺を簡単に殺せる事も知っているけど、一応……ね？

と言うか、まだ死にたく無いから、理性を吹っ飛ばすと言う事がありえないのだけ……。

「別に風紫さんなら、かまわないですけど？ねえ、萃香さん」

「文の言う通り！」

「あんた達は……」

呆れる霊夢。

ニヤニヤと笑っている萃香と文さん。

「どっちにしてもダメですよ。一緒に入るなら霊夢と入って来て下さい！」

「私は一人でまったりと浸かりたいから、私はパスよ」

俺の提案に霊夢は右手をパタパタと振りながら拒否反応を示す。

萃香と文さんは渋っていたが、最後は納得してくれた。

と言うより、多分、玩具にするのが飽きたただけだろうけど……。

はあ……。

その後は結局、萃香と霊夢が一緒にお風呂へ入る事になり、二人はお風呂場へ移動した。

居間に残されたのは、俺と文さんだけだった。

俺は文さんの湯呑みにお茶を入れ、零さない様に渡す。

「文さん、お茶、どうぞ」

「ありがとうございます」

大して会話も無く、黙々とお茶を飲む。

この静けさが何とも言えない空気を醸し出す。

普段の俺だったら、会話を探す事で必死になっているだろうけど、今は何とも心地の良い空気だ。

お茶を一口飲んだ後、小さな溜息を吐く。

それが合図となったのか、文さんが俺に顔を向け、口を開く。

「風紫さん」

「はい？どうしたのですか。そんな真剣な表情になって……。もしかして取材……ですか？」

「いえ、それでは無く……、いや、それもしたいんですけど、今は別の話です」

取材はしたいのか……。

でも、別な話って一体何だろうか？

「別に取材される程の人間じゃないですよ？俺……」

とりあえず、取材をされる覚えが無いし、普通の人間だから面白みが無いと言う意味を込めて、文さんへ言ってみた。

「そんな事ありません。風紫さんは面白い人ですし、密着していたら、面白いネタに当たりそうですからね！あ、コレは記者と女の感です！」

「そんな感は外れて欲しいです……。俺は普通の生活がしたいですしね」

そう言って苦笑する。

自分からトラブルに巻き込まれる気はさらさらありません。

しかし、文さんの表情は笑顔からまた、真剣な表情へと戻る。

何だろ、一体……。

「まあ、それは良いんです。私は記者だし、嫌がられても付いて行くだけですから。でも、正直、風紫さんには嫌われたく無いです」

……」  
「文さん？」

え？

何？

何なの、この空気……。

と言うか、何か文さんが凄く可愛く見えるのだけど……。

「その？文さん？では無く、？文？と呼んでももらえませんか？」

「はい？」

「私は、本当に初めて綺麗で可愛いと言ってもらえました。本当に嬉しかったんです。やっぱり普段は迷惑がられていましたから……。」

待て待て待て待て待てっ！

おかしいだろ！？

文さんの冗談で言った台詞のノリで俺が言った言葉がここまで影響を及ぼすなんて、ありえないって！

と言うか何故こうなる……？

「それで、風紫さんに興味が湧いたのも事実で……。」

「風紫。敬称や敬語なんていりませんよ。文」

「え？」

とりあえず、俺は文の言葉を遮って自分の言葉を出す。  
これ以上の言葉を聴いたら、何かダメな気がする。

だから、言葉を遮って強制的に話題を変えた。  
もし俺の言った事が原因だったら尚更だ。

「別に密着取材をされたからと言って、文を嫌う道理がありません。だから、そんなに考え込まないで下さい。それに俺は自分の言った事に嘘は無いと思います。他の人がどうであれ、俺は綺麗で可愛いと感じたから本音を言っただけですよ。言っただけですよ？一目惚れしても可笑しくないって。そんな人に密着されるなら、こちらからお願したいぐらいです」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

「いえいえ。それぐらいお安い御用です！」

綺麗で可愛いと言うのは本音だし、別に問題無いよな……。それに、文も俺と一緒に行動すると言うなら、俺の危険も少なからず遠くなる。

コレも持ちつ持たれつだよな……。

ただ、噂一つであっちこっちに飛ぶぐらいだから、後々が大変そうだけど……。

文は俺の言葉に両手を挙げて喜んでいた。

取材の許可が取れた事に対して、そんなに嬉しいのだろうか……？

「ただ、二つだけお約束があります」

「何なりとっ！」

「プライバシーに関しては記事にしないで下さい。後、記事は推敲する時に必ず見せて下さいね」

「分かりました。それはお約束します！」

あれ？

すんなり約束出来ちゃった……。

推敲に関しては『言論の自由が……』とか言われると思ったけど……。

文は落ち着かない様子で、メモ帳へ書き込みながらブツブツと独り言を言っている。

今度の記事のタイトルだろうか、そんな感じの独り言だった。

そんな文を見ながらお茶を飲んでいると、笑顔のまま文が俺に顔を向けた。

「あ、風紫。私は貴方の事を諦めるつもりは無いわよ？ 貴方は話題転換で話をずらしたつもりでしょうけど……。気の早い女と思われるかも知れない。だけど、それでもいい。だって私は、本当に貴方が好きになったみたいだから！ 覚悟しなさいな、風紫。妖怪は執念深いわよ」

そう言ってウィンクを一つ。

そのセリフを聞いた俺は湯呑みを口につけたまま固まる。

「ふふふ。さて、そろそろ霊夢達もお風呂から上がる頃だし、お風呂に入ってくるわね」

そう言って、文はお風呂へと移動する。

俺は相変わらず固まったまま。

こうなった原因を考えるが、やっぱり出会い頭の一コマと先程の



「何があつたのよ？文は凄くご機嫌だったし、戻ればあんたは顔を真っ赤にして叫んでるし……」

聞いてくる霊夢の顔はニヤ付いていた。

絶対に何かを確信している顔だ……。

「いや別に。ちょっと考え事をしていただけです……」  
「ふーん」

……。  
まだ顔がニヤけている霊夢。  
くっそ。

静まれ、俺の顔！

「まあー、何があつたかは聞かないけど、ちゃんと考えて行動しなさいよ？……、じゃないと、私も本気出せないし」

「え？最後、聞こえなかったんですけど……」

霊夢の声が段々と小さくなって行き、最後は殆ど聞き取れなかった。

俺の言葉に霊夢は微笑を一つ浮かべ、「何でもないわよ」と言いながら座り、お茶を求めて来たので、俺はお茶を注ぎ、霊夢へと渡す。



霊夢はお礼を言いながら湯呑みを受け取り、美味しそうに飲み始めた。

その様子に何処か優しい気持ちが込み上げる。

俺は自分の席を立て、自分と萃香と文の布団を敷きに部屋を出る。

居間へと戻った後、文と萃香がお風呂から上がっていたので、お茶を渡してからお風呂へ向う。

萃香って意外と長風呂らしい……。

お風呂は檜を使ったお風呂になっており、檜特有の香りが室内に充満していた。

昨日は手拭で身体を拭いただけだったので、お風呂に浸かると、とても気持ち良かった。

今日の疲れと昨日の疲れが、一気に溶けて行く様な感覚が全身を包む。

きっと、檜の香りも手伝ってリラクゼーションの効果を最大限に引き出してくれているに違いない。

お風呂を上がった後は居間に戻り、霊夢が花札を出したので、四人で話しながら花札勝負。

もちろん、花札なんて物は初めてやるので、何回やっても俺が最後だった。

時間も頃合になったので、それぞれが各自の部屋へと移動する。

自分の部屋に戻った俺は、今日の事を振り返る。

仕事に関しては絶望を味わったが、こうなれば自分で起業するしかない。

今度からはソレの準備に向けて動く事なる。

慧音さんの家から帰る途中に思いついた事だが、一応、何をするかは決めている。

文と萃香も居るのだ。

その二人が居るなら出来ない事では無い。

二人にはまだ許可を貰っていないが、話すだけ話してみよう。  
もしダメだったとしても、一人でやるしかない。

ただ、その為には霊夢に護身術などを教えてもらう必要があるの  
だけど……。

とりあえず、出来る事やって、後悔はその後にもすれば良い。  
香霖堂の店主さんとも話せるくらいには知り合いに慣れたし、簡  
単には潰れないだろう。

それ以外にも、予想外の事が色々起こった。

正直、告白をされた事は嬉しい。

嬉しいけど、もしそれに良い返事をしてしまったら、俺は幻想郷  
から離れられるだろうか……。

多分、無理だ。

きつと、離れたなくなる……。

そうすれば、現代に居る親達にも顔を見せる事なく人生を終えて  
しまう……。

それに、寿命の関係もある。

そんな色々な事を考えると、とてもじゃないが、直ぐに答えは出  
せない。

どっかの極楽大作戦の主人公みたいな状態になるとは思ってもみ  
なかつた……。

色々と考えながら横になっていた所為か、はたまた、今日の行動  
で身体が疲れていた所為か、睡魔が俺を襲う。

新しい問題を色々抱えつつ、睡魔に身を任せ、俺の幻想郷ライ  
フ二日目が終わった……。

とある廊下にて……。

「ふふふ」

「気持ち悪いわね……」

「いえ、自分の気持ちに正直なると言う事がここまで嬉しい事だとは思わなくて」

「そう、良かったわね。でもね、文。私も負ける気は無いわよ」  
「へ？」

「それじゃ、お休み……」

「スー、スー」

## 第二話 就職活動？ 終幕（後書き）

ここまでは、プロローグ的な内容になります。

本当は告白させる気なんて無かったのに、気付いたら文さんが勝手に行動していました……（汗）

恋心を持っていると言うニュアンスだけを書くつもりだったのに……

…（苦笑）

と言うか、何処でフラグが立ったのか作者にも分かりません（汗）

まあ、恋は唐突にとも言いますし、ここは大らかな心で見えて頂けると助かります（汗）

とりあえずイチャラブ系の話にはならないです。

あと、この話のメインは恋愛とは別なので、恋愛のタグは付けませんので、ご了承下さい。

まあ、そんな話は置いておくとして……。

上でも書きましたが、ここまでがプロローグ的な内容となります。

今後の話はここまですを基盤として展開されていきます。

こんなSSですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

次回予告……

第三話 事実は小説よりも奇なり… 一幕

「そうね。やっと本来の博麗神社が見れたわ……」

霊夢は俺の隣に立ち、そつと微笑みを魅せる……。

11月中旬～下旬公開予定。

### 第三話 事実は小説よりも奇なり… 一幕

- 01 -

幻想郷に来てから早い物で、既に自分の感覚で一ヶ月が過ぎようとしている。

仕事が無いと分かってからの俺は、自分の仕事を作る為に、色々な所へと出回っていた。

まずは香霖堂。

そこで、一万を幻想郷の通貨に変え、空気入れと自転車のパーツとタイヤを購入。

古くなつた自転車が幻想郷に流れていたので、店主さんに頼んで売らない様をお願いしていた。

次に博麗神社を直している大工さんに頼んで、多くの荷物が載せられる荷台を作って貰う。

ただ大工さん達も忙しいので、道具と木材を買い、ある程度は自分で組んだ。

不安な場所や作り方などは、親方さんに見てもらいながら作っただけ……。

荷台がある程度の完成したのを目処に、文へ頼んで新聞に広告を載せてもらった。

かなり卑怯な方法だとは思いますが、新しく事業を起こす上で宣伝は必要不可欠な事なのだ。

文の書く新聞はゴシック紙に近い内容の為、どこまで読者が付いているかは謎だった。

まあ、ゴシック紙と言っても、内容はちゃんと裏付けが取れた内

容なので信憑性もあるから、意外に面白い記事もあったりする。

それでも、幾分かの効果はあった様で、里に材料や食材を買いに行くと、ある程度、話しかけられる様になった。

因みに、ちゃんと記事の内容はチェックしているし、里で見せて貰う“文々。新聞”と俺がチェックする内容は一緒だったので、問題は無いだろう。

この仕事を始めるに当たって、霊夢と萃香、そして文に今回の事を相談した結果、良い返事が貰えた。

萃香も手伝ってくれるとの事で、何とか仕事中に殉職と言う事には成らなさそうだ。

文に関しては情報関係を手伝ってもらえる事になった。

なので、新聞を使った広告を出してくれた訳なのだけど、交換条件として仕事中に密着取材を受ける事になった。

何と言うか、やっぱり諦めて無いらしい……。

寧ろ本人が『これでずっと側に居られますね！』と言って来た事で、顔が赤くなったのは言うまでも無い……。

霊夢は場所の提供をしてくれた。

今後は博麗神社を拠点に仕事をして行く事になる。

後は、慧音さんの家の側と人里の数箇所にもポストを立てれば計画は完了となる。

ポストを立てる事に関しても人里の長と慧音さんに許可は既にもらっている。

博麗神社の改修工事が終わるのと合わせて、俺の仕事も開業する予定なのだけど、神社の改修作業は、大工さんが優先してくれているのか、予定よりも早く終わる事になりそうだった。

「まずいなあー。間に合うかな。これ……」

目の前にある相棒を見ながら愚痴る。

そこには荷台がひっくり返っており、自転車の車輪が取り付けられている。

動力を車輪に回そうとチェーンなどを使って試行錯誤を繰り返したが、上手く回ってくれない。

そもそもチェーンの長さが足りないので、紐で代用している時点で上手く回る訳が無いのだ……。

霊夢は『河童に協力してもらったら？』と言うが、その河童を俺は知らない。

萃香や文にも連れて行くと言われたが俺が断った。

理由としては、一人で出来る所までやって見たいからだ。

「とは言っても、お手上げかなあー……」

「おー、今日も頑張ってるなー」

「あ、親方さん」

俺が相棒と睨めっこをしていると、後ろから大工さんが声を掛けてくる。

大工さんはそのまま俺の隣に並び、一緒に相棒を見た。

「これ、ほぼ完成してるじゃねえーか」

「そうですね。手で押すなら……と言う条件付ですけど」

そう言って、車輪を回す俺。  
車輪は歪み無く回る。

このバランス調整が凄く難しかった……。

「やっぱり時間を掛けると、それなりに出来るもんだなあ」

「親方さん達のご協力のお陰でここまで完成したんですけど……ちよっち、まだ足りないかなあーと……」

「時には妥協も必要だぞ？」

「分かつては居るのですが、納得出来ないと言うか、何と言うか……。何かもどかしい感じです」

俺は苦笑しながら大工さんへ言う。

大工さんは俺の顔を見ながら笑い、そして肩を叩かれる。

「はっはっは。風紫も職人氣質だな！」

「そうですね？確かに外来に居た時の仕事も職人の様な事をしてはいましたけど……」

「お。そうなのか？」

「ええ、裏方関係と言うかそう言う類の仕事ですね」  
「なるほどな」

そんな世間話を相棒の前でしていると、お茶とお茶菓子を持って現れる霊夢。



「おう、お嬢じゃねえか」

「二人共、ご苦労様。これ、休憩にどうぞ」

そう言つて大工さんに渡すお茶とお茶菓子。

大工さんはお礼を言いながら受け取ると、作業をしている職人さん達を呼んで休憩を入れていた。

「ありがとうございます。霊夢」

「どういたしまして。ところで首尾はどう？」

「そろそろ限界が来ていますね……」

「頭の？」

そう言つて霊夢は笑つ。

確かに頭も悪いから言い返しは出来ないけど、それでも酷いと思うのだけど……。

「まあ、そうですね……」

だから、俺はぶっきらぼうに返答を返す。

霊夢は俺の反応に笑い、満足したのか謝りながら口を開く。

「ごめん、ごめん、冗談よ。こうなったら手で引くしか無いんじゃない？路面だつて良い訳じゃないんだし」

「確かにそうですね……。もう少し凝りたかったんですけど、

やっぱり妥協も必要ですよね……」  
「そうそう。ある程度で妥協を入れないと前に進めない事だってあるわよ」

そう言ってお菓子を食べる霊夢。

俺はお茶を啜りつつ、自分の相棒の車輪をもう一度回す。

そんな事をしていると、空から何かが向って来ている事に気付き、俺は空を見上げ、気配のする方を確認する。

「どうしたのよ？」

霊夢が不思議そうな顔をして聞いて来た。  
俺は視線をそのままに、霊夢へ返答する。

「いや、空からこっちに向かって来ている気配が……」  
「そう？ 私は何も感じないけど？」

霊夢は周りを見ながら言う。

長距離で掴める感覚はその日の調子で変わるけど、微かに気配がするのは間違い無い。

「微かに……ですけどね。文ですね、コレ。……いや、多分……」  
「ふーん。あんたも成長してるわね……。お母さんは嬉しいわ……」  
「今日は偶々ですよ。偶然、調子が良いだけです。でも、褒められ

るのは嬉しいですが……」

苦笑する俺に対して、泣きまねをする霊夢。

俺が幻想郷に来てから一週間たった頃だろうか。

霊夢が俺の霊力を鍛えると言いつ出した。

武器である子狐丸もあった事だし、身を守るぐらいにはならな  
いとダメだと言う事で修練が始まった。

その際、霊夢から子狐丸だけだと接近戦で不利と言う事で札も少  
し貰った。

まあ、基本は逃げる為の訓練なのだけど……。

そんな訳で、霊夢に言われる仕事の合間にチマチマと修練を積ん  
だ結果、人よりは少し鋭い程度 of 感覚を持つ事が出来る様になった。

まあ、コレのお陰で悪い妖怪に襲われずに済んでいるのも事実だ。  
気前の良い妖怪も中にはいるので、情報交換程度に話したりもす  
るし……。

何気に、妖怪と仲良くなりたいたいと言う目標もチマチマと成し遂げ  
ているのかもしれない。

「あ、見えてきましたよ」

俺が視認出来た事を霊夢に報告すると、霊夢も同じ方向を見る。

そこには鴉の様な羽を持った妖怪が一匹。

やっぱり気配の正体は文だった。

「風紫、様子を見に来たわよー」

「こんにちは。今日も暇なのですか？」

「あんだ、今日も暇なのね……」

文は俺の側へ着地し、相棒を見ながら横を抜けた後、そのまま俺の隣へ並び、俺と霊夢へ向って口を開く。

「二人共、？も？は酷いんじゃないですか？」

「だって、毎日来ているじゃないですか？」

そうなのだ。

あの日から文は取材と称しては、毎日、博麗神社に姿を現している。

萃香でさえ来ない日があるのに……。

柊さんの苦勞が目につく。

因みに、文が柊さんを博麗神社何度か連れて来たので、面識はあったりする。

その際、文が俺の事を彼氏だと勝手に紹介していたらしく、柊さんが色々と混乱していたけど、何とか誤解は解けた。

「ソレはアレよ。その……、取材よ！」

「へいへい」

「何よー、その反応。あ、正直に言って欲しいの？貴方に会いに来たって……」

何でそんなにクネクネしながら言つのです……？

「別に言わなくていいですから！」

「あんた達、程々にしないさいよね……」

霊夢が呆れながら注意をする。

俺は熱くなる顔を隠す様に相棒の下へ移動し、相棒をひっくり返す。

文は霊夢の隣へ移動し、お茶を貰いつつお茶菓子を一口。

相棒をひっくり返した後、その様子を見て思わず苦笑が出る。

「どうしたのよ？」

霊夢が首を傾げながら聞いて来た。

俺は素直に今の気持ちを口に出す。

「いや、何かこう言うのっていいなあと思って。日常をこんな感じで過ごせるなんて思っても見ませんでしたから」

「ふーん。風紫さえ良いなら、ずっとここに居ても良いんだけどね？」

「あはは、のんびりと考えますよ」

「私は、風紫が帰るなら一緒に付いて行くだけですけど。外来がどんな事になってるか興味もあるし！」

文が爆弾発言をしているが、遭えて流す。

霊夢と文は、外来の話題で話し始めた。

こんな仄々とした日常なんて、俺が居た世界ではそんなに無いだろうな。

休日でも仕事だったし、何処かに行って休養を取ったりする事が稀だった。

だから、こうした事が凄く新鮮になる。

多分、俺は凄く恵まれている。

神隠しの後、下手したら死んでいたかも知れないのに、直ぐに霊夢や萃香に会えた。

そこから始まる俺の新しい生活や、俺を、その……好きだと言ってくれた文も居る。

こう言う日常を俺は無くしたくないと思っているし、でも、現代に帰らないと行けないと言う気持ちもある。

何時かはこの気持ちにも決着を付けないと行けない。

だけど今は、少しぐらいこの幻想郷を楽しんでも良いよな……。

相棒を見ながらそんな事を考えていたら、何時の間にか大工さんが隣に居た。

「風紫、相変わらずモテモテだな？ええ？」

顔が少し怖いのです……。

俺は手を振りながら親方さんの質問に返答をする。

「気のせいですよ。俺がモテる筈ありませんから……」

「そうは思わねえが、まあいい。ほれ、頼まれてた塗料だ。緑と茶色のな」

「わぁ！有難うございます！ー！」

俺は塗料を受け取って、大工さんに頭を下げる。  
コレで相棒がより完成に近づく。

「なあーに、別に良いって事！ちゃんと代金も貰ってるしな」

「いえ、でも忙しい中で急なお願いでしたから、本当にありがとう  
ございます！」

「気にすんな！足りなくなったら、また何時でも言ってくれ！」  
「はいっ！」

大工さんは笑いながら自分の現場に戻って行った。

その様子を確認した後、俺は前掛けを付けて茶色の塗料を開ける。  
茶色で下地を作り、上に緑で葉っぱ等を書く予定だ。

妖怪に襲われた時、こうする事である程度の力モフラージュは出  
来る。

鼻が良い妖怪などには一発でバレてしまいが、何もしないよりは  
マシだ。

「結局、手押しにするのね」

霊夢が作業を始めた俺の側へと移動していた。  
その隣には当然、文も居る。

「はい。やっぱり動力を付けるとなると大変ですし、その辺りは追  
々やろうかと。それに塗料を塗るにも、数日の時間は必要ですし、

間に合わない可能性もありますからね。だったら、安全策を取る事にします」

「その方が良いわね。河童に頼めば直ぐだけど」

「あはは。河童さんの技術は知り合ってから頼む事にしますよ」

俺は塗料を塗りながら霊夢の質問に答える。

文は黙って俺の作業を見守っていた。

いや、違うな……。

メモを取りつつ、写真も取っているから、黙ってと言う訳では無いな……。

「さて、それじゃ私は夕餉の準備をしてくるわね。文、あんたはどうするの?」

「もちろん、一緒に頂きます!」

「それじゃ、支度、手伝いなさいな」

「はい」

霊夢と文は二人で社務所兼母屋の方へと向って行った。

何か傍から見ると姉妹みたいな感じだ。

魔理沙とか萃香もそうだけど、霊夢ってお姉さん気質でもあるのかも知れない。

そんな事を考えつつ、塗り残しが無いように集中して塗って行くのだった。



「完成、おめでとうー!!」

あれから数日後、神社の修繕と俺の相棒作りが終わったのを祝って、身内で小さな宴会が開かれた。

動力を諦めた俺の相棒は直ぐに完成した。

まあ、塗料を塗り文字を書くだけだったし、当然と言えば当然だが、神社に関しては本当に凄く綺麗になった。

改めて見ると、本当に立派だ。

流石に涙までは流す事は無いけど、何処か感無量になっている俺が居た。

「本来の姿を見せられると、言葉を無くしますな……」

俺は右手にお猪口を持ちつつ、一人で言う。  
何とも言えない感動が俺の全身を包み込む。

「そうね。やっと本来の博麗神社が見れたわ……」

何時の間にか霊夢が隣に居た。

俺が霊夢に気付いて隣を見ると、霊夢は頭を下げていた。

「素直にお礼を言うわ。本当にありがとう、風紫。こうして、神社本来の姿に戻れたのは貴方のお陰よ」

「ちよっ！顔を上げて下さい。コレは俺の我俣でもあるのですから、そんなに頭を下げられても困ります！」

俺は霊夢の肩を掴み、顔を上げさせる。

霊夢は顔を上げた後、微笑みながら「ありがとう」と一言口にする。

今の霊夢の微笑みは、どんな妖怪だって人間だって魅了する。

そのぐらいの魅力が込められていた。

当然、それを目の前にした俺は見惚れてしまう。

「どうしたのよ？」

「いや、その……」

霊夢の言葉で我に返るが、酔っている所為で言葉が上手く出ない。

「まったく、変な風紫ね」

そう言ってまた笑う霊夢。

だから、その笑顔が反則だと何度……。

心の中で溜息を吐きながら俺は目線を霊夢から外し、神社を見な

がらお猪口を口にする。

普段はあんまりお酒を飲まないが、こう言う宴会などは別だ。

流石の俺でも宴会などはお酒を口にする。

前々から気になっていた萃香のお酒を少し分けて貰ったが、これが意外と飲みやすい。

「ねえ、風紫」

萃香から貰ったお酒をゆつくりと口に含んでいると、神社を見ている霊夢から声が掛かった。

俺はその言葉で霊夢へと視線を向ける。

その顔はどこか真剣だった。

「やっぱり、まだ帰りたい？」

「どうしたのですか？急に……」

突拍子も無く行き成りな事を言い出す。

俺は現実世界には帰れないのだろうか……。

「ただ何となく。帰れる時には帰すわよ。ただ……」

そこで口を閉じる霊夢は少し俯き、どこかハッキリしない。

何か思ふ事でもあるのだろうか……。

そんな霊夢を元氣付ける様に声を少し大きめにして言葉を口にす

る。

「……。うーん、帰りたく無いと言えば嘘になりますね。でも今の状態だと、帰れる時が訪れてくれるのかも分かりません……。それに本当はちよつと分からなくなっていました。ココに来てから日数もそんなに経っていませんが、ハッキリとココの生活が好きだと言えますし、でも外の事も気になると言えば気になります。多分、俺の中でずっと迷う事になりますけど、考えられるだけ考えて答えを出そうと思います。だから、答えを出すまでは迷惑かも知れませんがお世話になりますね、霊夢！それに俺の仕事は明日からですし、気合を入れないとっ！！」

俺は霊夢に迫力の無い力瘤を笑いながら見せる。

幻想郷に来てから単発のお仕事は結構やっていたりする。

神社の修繕で人が足りない時に手伝ったり、慧音さんに言われて学校の修繕やら用品を自作したり……。

時には香霖堂へ赴き、店主さんと雑談しながら鑑定をしたり、慧音さんに言われて学校で算数を教えたり、文に拉致されて妖怪の山へ連れて行かれそうになった時は、流石に焦ったけど……。

人間や妖怪を問わず、里でも色々知り合いが増えた。

その中でも、慧音さんが獣人で店主さんが半人半妖だったのは驚いた。

普通に人間だと思っていたよ……。

文とか萃香に関しては羽に角で直ぐ分かったけど、あの二人は見た目が人間だし、本当の事を教えてもらった時は本当に驚いた。

そんなまだまだ俺だけど、何とかこの一ヶ月を過ごして来ているし、一ヶ月しか経っていないとしても、俺はこの幻想郷を好きになっている。

今の現代も好きだが、こう言う生活も嫌いじゃない。  
だから余計に戸惑う。

帰りたく無いと言う気持ちが出てくる事に……。  
でも、何れは必ず決めないとダメな事だし、俺にはちゃんと答えを出す義務がある。

今は答えを出せなくても、何時か必ず……。

「あんたも忙しいわね。ころころと表情が変わって面白いわ」  
「ははは……。すみません」

霊夢の言葉で我に返り、俺が見た時の霊夢は手を口に当てて笑っていた。  
確かに考え事をしていたとしても、相手が居る所で考える内容じゃないな……。

「別に謝らなくても良いわよ。明日から期待してるわよ？」  
「はい！！頑張ります！！！！」

俺はサムズアップを霊夢に見せ、その後、二人で神社を見る。  
……。  
よし。

「霊夢、ちょっとコレ持っていて下さい」

そう言つて、お猪口とお銚子を啞然としている霊夢へ預け、本殿の側まで歩き、現代の通過では無く、幻想郷の通貨を賽銭箱へ入れた。

慧音さんや大工さんのお手伝いをした時とかに、ちゃんと給金は貰っていたりしたのだ。

微々たる賃金なのだけど……。

そして、二拝二拍手一拝。

そこに思ふのは、この世界の安泰と自分の安泰、最後に、幻想郷で出会った人達の無病息災。

賽銭箱に入れた金額ではあまりにも多い願いかも知れないが、それでも願わずには居られない。

俺は霊夢の隣へ並び、お猪口とお銚子を受け取る。

「ありがとうね」

今度は笑いながら言ってくれた。  
だから俺も笑いながら返す。

「どういたしまして」

言つた後、お酒を飲もうとしてお猪口にお酒が入っていない事に気付く。

手酌でお酒を注ぐとすると、霊夢が注いでくれた。

俺も霊夢のお猪口へお酒を注ぐ。

そして、俺と霊夢は無言で杯を交わした。

「なーに二人で良い雰囲気になってんだ？」

そこに来たのは魔理沙だった。

ほんのりと顔を赤くし、それなりに酔っている様だった。  
霊夢は魔理沙の言葉に対して、ぶっきら棒に返事を返す。

「別に……。そんなんじゃ無いわよ」

「ふーん。まあ、別に良いんだけど。あっちに居る大工と飲み比べする事になったのよ。霊夢も参加するわよね？」

魔理沙の口調は普段、男言葉が率先して出るが、酔っていると、男言葉は也を潜める。

寧ろ、男言葉を使っていない会話を聞いていると、魔理沙が男言葉を無理して使っている感覚がある。

最初、それに気が付いた時、俺は魔理沙に理由を聞いた。

帰って来た答えは意外に簡単で、『なんとなく』なのだそうだ。

ただ、あの魔理沙の表情を見る限り、何かあるのだろうとは思う。  
目を下弦の月へ向け、どこか寂しそうな表情をしていたのだから

……。

『魔理沙』

『ん？』

『余計な事かも知れないですけど、俺や霊夢とかの前ではあまり無理しないで下さいね』

『……。ああ、わかったよ』

余計なお世話だとは思ったが、その言葉を口に出さなければ思  
い口走ってしまったけど、魔理沙は優しい微笑みで返事を返して  
くれた。

魔理沙でもこんな表情が出来るのかと、ちょっとビックリしたの  
は内緒だ。

そんな事を考えていると、霊夢と魔理沙の会話が終わったらしく、  
霊夢は魔理沙に手を引かれながら大工の居る方へと連れられて行く。  
俺は連れられて行く霊夢に手を振ると、霊夢は溜息を一つして、  
手を振り替えてくれた。

とりあえず、大工を含めて二人が急性アルコール中毒にならない  
事を祈るだけである……。

「さて、俺は何をしますかね……」

この場に居る皆さんの姿が確認出来る場所に座って、一人ごちる。  
……と言っても、本殿の階段に座っただけなのだけ。

目の前には明日から共に活躍するであろう相棒が置かれている。  
萃香と霊夢と魔理沙は大工の皆と一緒に飲んで盛り上がっていた。  
酒の肴は、俺と霊夢で結構な量を作ったのだが、既に全部が無く  
なっている。

他には大工さんや文が持つて来てくれた肴が少量あるだけだ……。  
大工さんの持つて来た肴は、里でも評判の料理だった。

文は椀さんを使ってまで大量の山の幸を持つて来てくれた。

椀さんにも参加してもらう様に頼んだが、山の警護があるらしく、  
直ぐに戻ってしまった。

山の幸は川魚だったり山菜だったりと富んだ内容だったので、肴



が無くなりかけた所で追加の料理を作っていたのだが、今は皆がそれぞれで勝手に食べている。

そんな様子を見つつ、楽しくもあるが憂鬱にもなってくる。後で片付けるのって、きっと俺と霊夢なのだろう……。

はあ。

そんな思考と共に皆を眺めていたら、一人居ない事に気付いた。

「あれ？文は何処にいったんだ……」

俺は回りを見渡して確認するが、文の姿は確認が出来なかった。何も言わずに帰ったのかなと思っていると、頭の上から声が掛かる。

「やっと……、気が付いてくれたみたいね」

神社の上で飲んでいたのだろう。

文は上から降りた後に俺を連れて、再度、神社の屋根へと上った。

「本当はもっと早くに誘うつもりだったのに、霊夢と良い雰囲気になっていたから入り込めなかったわ……」

「ははは。別にそんな空気には成って無かったと思いますよ？」

ただ、一緒に喋ってお酒を飲んでいただけだ。

そんな良い雰囲気には成って無いと思うのだけど。

「……、はあ……」

盛大に溜息を付かれた。

何故……！？

「まあ、そんな事より月、綺麗ですよね」

この話は続けては拙いと思い、話題を変える。

実際に月は綺麗だし嘘は言っていない……。

文は少しジト目で俺を見ていたが、フツと表情が柔らかくなり、俺のお猪口にお酒を注いだ後、話を合わせてくれる。

「そうね。酒の肴には丁度良いわ」

「そうですね」

俺も文のお猪口にお酒を注ぎながら肯定する。

お猪口に入ったお酒の中に下弦の月を写し、それを見る。

コレが本当の月見酒。

そう思っているのは俺だけかも知れない……。

お酒に写っている月を見ながらお酒を飲み、そして最後に本当の月を見る。

お酒の中に居た揺らめく月も綺麗だが、本物の月はもっと綺麗だった。

昔の人が月を見ながら色々と詩を詠んだのが分かる気がするね。

「綺麗ね」

文が言う。

「そうですね。俺の居た所ではこんなに綺麗に見えませんでしたよ」

俺が肯定する。

「ねえ、風紫」

文のお猪口にお酒を注ぐ。

「何ですか？」

文が俺のお猪口にお酒を注いでくれる。

「……うつん。何でも無い」

そう言っ て俺の肩に体重を預けながら微笑む文。

意外に軽い事に驚きつつも、慣れて居ない状況で身体が変に反応する。

文の仕草を目の前で見せられ、変な所で妖怪でもやっぱり女の子なのだと感心した。

「……えっと、こう言う状況に慣れていないので、ドキドキしているのですが……。」

俺は正直に話す。

文はクスクスと笑っているのみ。

俺はお酒を口に含み、月を見ながら飲み干す。

どうしよう、緊張して上手く言葉が出せない……。

「大丈夫、その内に慣れるわよ」

「了解、頑張るです……って言うか、慣れるまでやろうとしないで下さい……」

俺はその言葉に頷きながら反論する事しか出来なかった。

宴も酣となり、辺りが静寂へと支配されて行く。

文に頼んで屋根から下ろしてもらい、その様子を俺と文は黙って見ていたが、暫くすると文は飲み疲れたのか、そのまま寝てしまう。周りをを見ると、皆も力尽きたのか、その場で寝てしまっていた。

俺は文を所謂、お姫様抱っこをしながら家に運ぶ。

その後、霊夢と萃香と魔理沙を順番に家の中へ入れ、女性陣を布団に寝かしつける。

女性陣達を寝かしつけた後は、宴会が始まる前に毛布を出せるだけ出して置いたので、それを部屋へ取りに行く。

そして、他の大工さん達も毛布を掛けてあげた。

大工さん達には悪いけど、外で寝てもらう。

身体も丈夫そうだし、風邪とかも大丈夫だろう。

多分……。

毛布を持って大工さん達の所に着くと、飛んでない光景を目にする。

実はこの大工さん達、毛布を持参していた。

もともと徹夜で飲む気だったらしい。

すっかりしていると言うか、何と言うか……。

俺は持って来た毛布を全員に掛け終わった後、顔を軽く洗い、自室に引いてある布団に入り込み、明日の事に思いを馳せながら一人ゆっくりと瞼を閉じるのだった。



### 第三話 事実は小説よりも奇なり… 一幕（後書き）

お待たせして大変申し訳ありませんでした。  
遅くなりましたが、漸く公開出来ました！

年末から年始に掛けて少し急がしなるので、次回の更新は年内中には行いたいですが、ちょっと見通しが立っていません。

遅くとも来年の一月下旬までには公開出来る様に頑張るつもりです。  
それでも見守って頂ける方は見守って頂きたいと思えます！！

次回予告……

第三話 事実は小説よりも奇なり… 二幕

「それじゃ霊夢、行つてきます」

「行つてくるぞー！」

俺達を笑顔で見送ってくれる霊夢。

俺は手を軽く振り、荷馬車を前に動かした……。

12月下旬～2011年1月下旬公開予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3452n/>

---

幻想奏鬼響

2010年11月25日23時45分発行